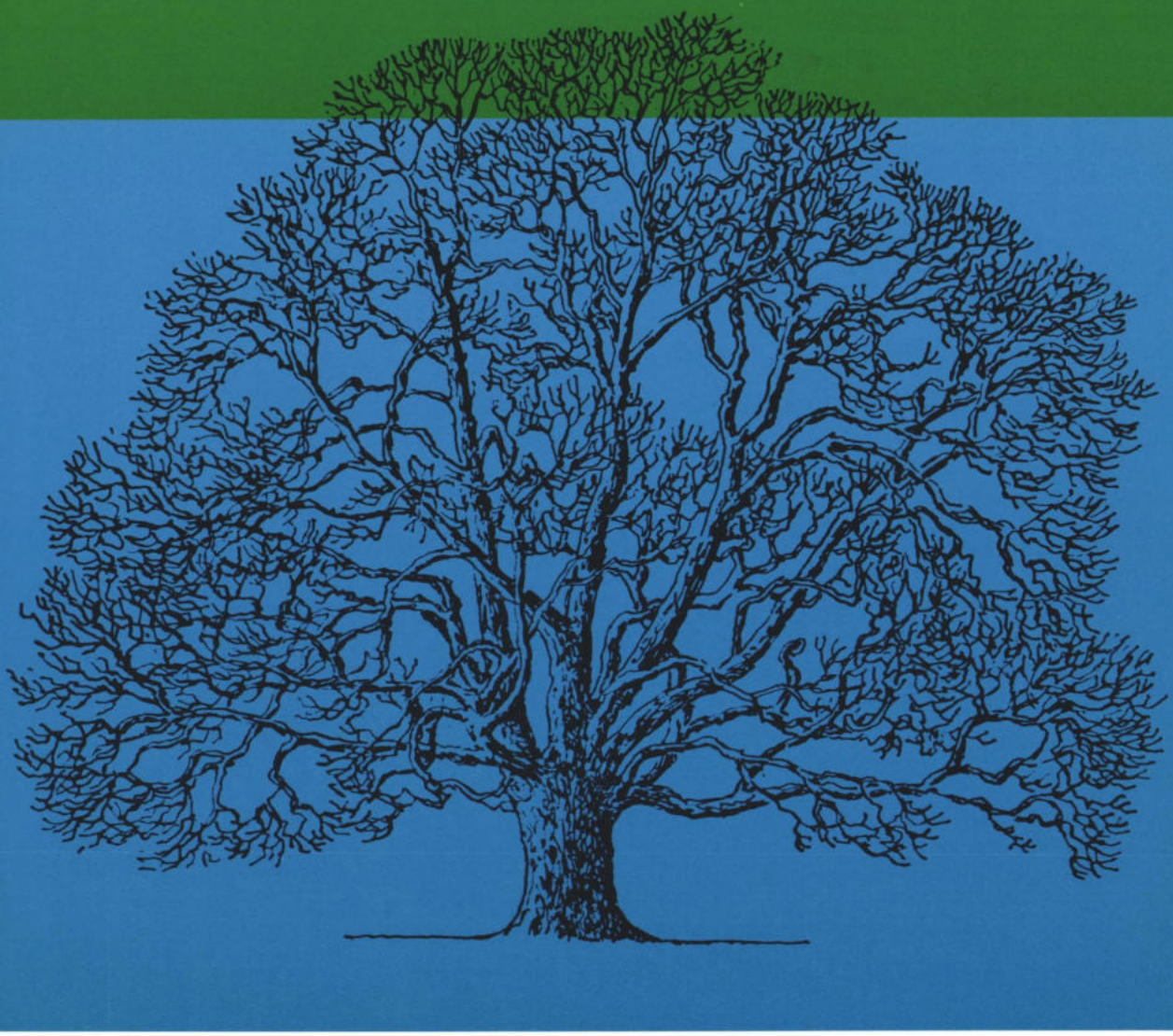
NO. 62
SUMMER
1978

# 英語展望

ELEC BULLETIN

## 特集：英語を好きにさせる指導法(2)

（座談会）中田　実・大貫辰雄
菊地君子・下村勇三郎



ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL

# 英語展望

No. 62
SUMMER
1978

*ELEC BULLETIN*

Edited by Natsuo Shumuta and Akira Ota
The English Language Education Council, Inc.
3-8, Jimbocho, Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo

【国際展望】
ジミー・カーターとアメリカ南部……猿谷 要 2
NATIVE AMERICANS ……山本 昭 10
【特集】 英語を好きにさせる指導法 (2)
座談会：英語を好きにさせる指導法……
中田 実・大貫辰雄・菊地君子・下村勇三郎 12
誰でもできる家庭学習……大金 津義 18
英語学習における創造性の育成……海野 英雄 20
「英語ギライ」と学習意欲を高める指導……石川 喜教 22
学習意欲を持続させるために……鈴木 敦 24
バラッドの世界（その12）……平野 敬一 25
命令文・インペラティブ・言語と文化……原口 愚常 30
言語活動重視の機能主義へ……橋内 武 36
【英語教育の情報と資料 3】
Gooficon について ……有元 將剛 38
【新刊書評】 *Everyman's English Pronouncing Dictionary* (14th ed.)……貝瀬 千章 42
『言語戦争』……國弘 正雄 44
新刊紹介……45
新刊案内……47
展望通信……48

表紙デザイン
太田英男

# ジミー・カーターとアメリカ南部

猿 谷 要

## 典型的な南部地域の住民たち

きょうは，カーターさんとアメリカ南部のことについてお話しするわけですが，これはなかなかむずかしい，わかりにくいことでして，私がいまどれだけ話ができるか疑問ですけれども，アメリカで南部といっているのと，最近，Sun Belt とアメリカがいうのはずいぶんちがうわけです．日本でも『権力の逆転』というタイトルで2年ぐらい前に翻訳された *Power Shift* という本があります．いままで北に片寄っていた富が南のほうへずっと移動してきた，ということを書いた本ですが，これはアメリカでも非常に問題になった本で，"Sun Belt"とか "Southern Rim" ということばを使って，アメリカの南半分が最近急速にクローズアップされてきたということをいったわけです．アメリカは人工的に州の境をつくるところが多いですから Virginia, Kentucky の南の境界線，さらに Missouri の南端から Kansas, Colorado の南端の線が一直線になっています．この線を大体南北の境にして，北半分，南半分というふうに考えて，そしてこの南半分のことを Sun Belt というわけです．けれどもきょうお話ししようと思っている南部というのはそうではありません．アメリカで South という場合にはまるきりそうではないのです．

South というのは，非常に古い，歴史的なことばですし，さらにこれに deep を加えて，Deep South ということになると，メキシコ湾寄りの，南部の中でもさらにまた南部の，南部的特色の一番濃いところです．州別でいうと，ミシシッピー川が海に入るところの前後あたりから始まって，ルイジアナ，ミシシッピー，アラバマ，ジョージア，サウスキャロライナ，これはほんとうの典型的な南部です．

フロリダは地域的には南部ですけれども，私がこれからお話ししようと思っているような意味での南部ではないのです．それよりも，強いて入れれば，テネシーとかアーカンソーのほうが，むしろ典型的な南部といっていいでしょう．もう少し南部の範囲を広げますと，やはり南北戦争のときの南部というふうにすると，一番範囲が広がってくる．そうするとテキサスまで入るわけです．もちろんフロリダも入りますし，ノースキャロライナ，ヴァジニアまで入るわけです．それから，ウエストヴァジニアというのは，南北戦争が始まった時にはできていなかったのです．それからケンタッキーが入ります．ミズーリが入ります．ここにオハイオ川という川が流れております．このオハイオ川の南は全部南部です．

要するにいま私がお話ししようと思っている南部は，南北戦争のときに南部に入った州，または奴隷制度を持っていた州ですが，これは必ずしも一致しないのです．奴隷制度を持っていたけれども，南北戦争には参加しないで中立をしていた州もあるので，ちょっと一致しないのですけれども，とにかくここらあたりをきょうお話しする南部と考えていただいていいと思うのです．

なぜこういうふうに最初に限定したかというと，実は Sun Belt といわれているこの南半分のうち，東半分と西半分では性格が全然ちがうからです．

東半分と西半分がどれだけちがうかということをお話ししますと，まず住んでいる人間のバックグラウンドがまるきりちがう．たとえば東半分では白人のほかで一番多いのは黒人ですが，西半分になると，白人のほかで一番多いのは，チカノといわれる人たちです．チカノというのはメキシコ系アメリカ人，メキシカンというのがだんだんなまって，チカノになったというのですが，とにかく西半分はメキシカンが圧倒的に多い．

それから Sun Belt が豊かになったといったって，その豊かになったところは特定の3か所なんです．平均的に豊かになったのではないのです．その特定の3か所というのは，フロリダの特に大西洋岸と，テキサスと南カリフォルニアです．そのほかのところはずいぶんいまでも貧しいのです．

というのは，非常にはっきりしているのは，10年に1

回の personal income についての調査結果によると，個人収入の州別の順位で50州中50番，49番，48番というのが，アーカンソー，アラバマ，ミシシッピーということのところにかたまっている．あとはジョージアを除いてはみんな40番台です．実に貧しいところです．

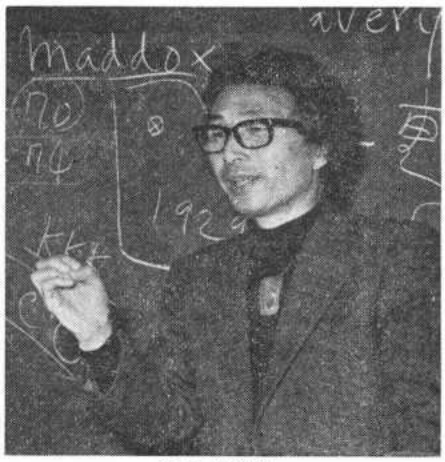
その Deep South の中で一番いいのはジョージアで，50州中29番です．1番いいところから大統領が出たのです．やはり政治と経済の関連というのはあるのです．それでも中の下ぐらいです．どうしてこんなにみんな悪いのかというと，ここに住んでいる住民の30％ぐらいが，あるいは30％ちょっと割るかもしれませんが，貧しい黒人であるということが一番大きな理由です．

それから poor white という，たとえばコールドウェルの小説なんかに出てくる貧しい白人，それはやはり多いです．特にこのアパラチア山脈の周辺に多いです．レッドネックといわれるような人たち，非常に教育程度も低いし，貧しくて，同一の職を黒人と争うような人たちですから，そういう層がまた黒人に対する競争心が強くなる．同じ白人でも，むしろ中産階級の上ぐらいの人が公民権運動の指導者になる．ところが不幸にして，南部は中産階級の下ぐらいの白人が多いものですから，黒人との利害関係が，特に衝突することになるわけです．そういうような特色が依然として南部にあるわけです．

## スタインベックとアメリカ南部

それでいままで南部のイメージというのはどうだったろうか．いま私はある文章をご紹介します．ケネディが大統領選挙に出た年ですから，いまから十数年前の話ですが，スタインベックが，たった一匹のチャーリーという犬を連れて，トラックを運転して，4か月ぐらいかけてのんびりアメリカ中を回ったわけです．そのことをあとで *Travels with Charley* という本に書きまして，私の友だちがそれを『チャーリーとの旅』という題で翻訳しております．

そこで彼があちこちドライブして回ってきて，いよいよ南部にさしかかったときに，どう書いているかというと，「さて，私はそれぞれ独自の性格を持つ各州を通り抜け，雲のような無数の人間の間を通り抜けてきたわけだが，いまや前途に一つの地方がある．それは南部である．行ってみるのはこわかったが，行って見て聞かねばならぬことは，前から覚悟していた．私は苦悩や暴力にはひきつけられない．やむを得ない限り，事故現場は見ないことにしており，スリルを味わうために，街頭のけんかを見物するようなことはしない．私はビクビクしながら，南部に向かったのである．南部には苦痛と混乱があり，困惑と恐怖の，あらゆる狂気じみた結果がある．それに南部は，アメリカのからだの一部なので，その痛みは全身に響いてくる」という1節があるのです．



猿谷 要先生

この描写は異常でしょう．第二次大戦直後に，四国が日本から独立しようとした話がちょっとうわさのようにあったことがあります．そうかといって，いま連絡船で瀬戸内海を渡って四国へ入っていくときに，異常な緊張を覚えるなんていうことはあるわけがない．ですから日本人からみると想像ができないのです．

私がニューヨークにいたときに，仲のいい友だちの，本多勝一さんがたずねてきて，これから南部へ行きたいのだけれども，一番南部らしいすごいところを教えてくれというものですから，私は，ミシシッピー州のミシシッピー川沿いのところを，ここは一番すごいよといって話したのです．私は彼が出かけていって帰ってきたころ，アトランタに引っ越していましたら，ニューヨークからアトランタへ電話がかかってきて，いきなり，「先生，南部っておっかないところですね」というのが，本多さんの電話の第一声でした．

彼は日本へ帰ってきて，『アメリカ合州国』という本を書いた．あの本の中に写真がありますけれども，彼は南部で自動車を運転していて，すれちがいざまに，向こう側の自動車からライフルを撃ち込まれて，フロントガラスにひびが入ったという写真も出ていました．もっとも彼はジャーナリストですから，たとえば2—3か月の取材で，一番効果をあらわすようにするためには，一番ショッキングなやり方をしなければならないわけです．だから彼が通ったすぐあとで，今度は私たち夫婦が同じコースをドライブしたって，何事も起こらないのです．なぜかというと，それは夫婦連れであるというこ

と，それから私のナンバープレートは，そのときジョージアのナンバープレートに切り変わっていたのです．

## 南部の特殊性

とにかくアメリカ人自身の中で，いくつかの，Southについての特殊なイメージがあるわけですが，どんな特殊なイメージをいままで持たれていたか，考えてみたいと思います．

Racism，これは人種差別のひどいところだという意味です．Racismということばは，アメリカでいやというほど一般化したのですが，日本ではまだあまり一般化しない．訳もしにくいのです．人種主義なんて訳すとどうもピンとこないのですが，ほかにどうしようもないのです．

次は，南部にはaristocracyのにおいが濃厚だということです．というのは，奴隷制度のときには，1人で100人も200人もの奴隷を持っていた人がいたわけですから，そうするとどうしても生活は貴族的になってきます．『風と共に去りぬ』という映画の冒頭に出てくる，豪華なplanterの生活，四頭馬車をしつらえて園遊会に出かけていくというあのはなやかな生活，戦争が始まったといって知らせがやってくる，あの園遊会，あれはあまりdemocraticではありません．どちらかというとaristocracyの社会に近いのです．

それから，非常に暴力的だということです．奴隷制度みたいなものを維持していこうとすると，やはり暴力が多くなるのでしょうか，非常に暴力的です．いまでもそうです．たとえばヒューストンという町があります．ある本を読んでいて驚いたのですが，ヒューストンでは，釣りに行く場合でさえも，皆ライフルを自動車に積んでいくというのです．アメリカでは，自動車事故で死ぬ人が多いのですが，ヒューストンでは，自動車事故で死ぬ人よりも，ライフルで撃たれて死ぬ人のほうが多いというのです．

次にもう一つの特色として，agricultural mentalityということをあげられると思います．というのは，いまでこそかなり工業化してきましたけれども，アメリカの農業地帯の中心の一つです．ただし，アメリカの農業地帯は南部だけではなくて，主食の麦類，トウモロコシ，それから酪農という方面については中西部が中心で，南部は昔から綿花です．綿花でだめだったら，カーターさんみたいに，ピーナツ畑に切り変える人もいますけれども，とにかく南部型農業地帯であることには変わりありません．ですから精神構造が農業的にできているということです．だからわりあい教育程度が低い．それから保守的で，禁欲的で，バイブル中心的という特色があります．

最後に，これが一番問題のところですが，南部人が北部人に対して，南北戦争以来，非常に大きな，屈折したコンプレックスを持っているということです．そしてこのコンプレックスは，比較的最近まで消えていなかった．

たとえばケネディ大統領時代のことですけれども，南部の高校生が，修学旅行みたいにニューヨークへ行くと，必ず国連本部をたずねるわけです．国連の本部へ入っていく南部の高等学校の団体は，大抵一番先頭の人が，南北戦争のときの南部の旗を持って入っていったというのです．またそのころは，南部のテレビは，たとえば時間が切り変わるほんのわずかのときに，州によってちがいますけれども，南部の旗を出すのです．もちろん州庁舎には，自分の州の旗がひるがえっていますし，場合によっては，星条旗と並べて掲げているところがあります．

南北戦争以前は全然そんなことはなかったのです．なぜかというと，初代から16代までの大統領の間に，9人が南部出身の大統領です．このときからあとが，まるきりだめになってしまった．特にDeep Southから一人も出ないのです．そうすると，ここに何かあったんだということになる．16代がエイブラハム・リンカーンですからね．そうするとここで南北戦争があっていかに南部が痛めつけられたかがわかるわけです．『風と共に去りぬ』の後半をみると，南部を占領した北部軍が，どんなことをやったかということを，いろいろ書いてあります．それで南部の連中はまるきりやっていけないくらいひどい目に会った．その後もずいぶんやられています．

たとえば北部の資本家が，戦争のずっとあと，南部に鉄道を敷くわけです．そうすると南部のほうは，1マイル当たりの値段を高くするのです．北部の資本家は平気でそういうことをやった．理由もあるのです．北部だって南部だって，1マイル当たりの建設費は同じだ，ところが南部は北部よりも人口が多くないから，1マイル当たりの収益が減るというのです．同じように，列車を走らせても，南部のほうが乗る人間が少ないから，南部だけ運賃を高くするのだと．しかも駅の近くの荷物を入れておく倉庫代まで高くする．南部人からみると，いつでも北部人に迫害されているという感じがずっとこびりついてしまった．こびりついた最後に，公民権運動が起こったわけです．

これは守勢の南部人からいうと，これまた北部の白人がやってきて，自分たちが，せつかく南部的生活様式を

つくり上げているにもかかわらず，それをまた攻撃してくるのだという，守勢の立場から考えられるのです．そう考えると南部は少しずつわかりかけてくるのです．南部というのは，なぜそんなに特別に悪いところだったのか，なぜいままで貧しいかというとたとえば何か南部に産業があるように思っても，それは北部の資本家が資本を投下したにすぎないからです．

## 元ジョージア州知事，L. マドックス

ジョージア州に話を移します．州都がアトランタです．Lester Maddox という人がカーターさんの直前の州知事でした．この人は1966年から70年まで州知事をやったのです．カーターさんは71年から74年までやって，2年間特別な職務につかないで選挙運動をやり，そして76年の大統領選挙で当選したのですから，その間彼は公職を持っていません．

このレスター・マドックスという人は，ある程度語るに値いする人物です．この人は非常に禁欲主義的で，小さなときから苦労している．大体この年代の人というのは，少年時代に1929年の大恐慌を経験しています．1929年の大恐慌から30年代いっぱいにかけて，相当貧しかった．そのときに貧しい南部で生活した人ですから，彼は高等学校を途中でやめているのです．それからお父さんからわずかなお金をもらって，その金で彼は通りに小さなスタンドをつくって，そこでものを売ったりするという，もう10歳にならないうちからそういうことをやらされている人です．

この人がアトランタに，最初は小さいのですけれどもレストランを作った．大衆食堂みたいなものです．それがだんだん当たってくる．そのうちとうとう座席数が300ぐらいの，かなり大きなレストランになった．300になると，コンパートメントもできます．小さな部屋で，会合しながら食事するということができてくる．そうすると町の政治家たちが，そこへ集まるようになってきた．

彼も政治的な野心があったので，アトランタの市長選挙に2回出るのです．2回とも惜しいところで負ける．ということは，これ以上やってもだめだということです．それはアトランタという町は相当大きな町ですから，liberal な人が相当いる．しかしジョージア州全体では conservative なんです．

そこで彼は考えたわけです．アトランタの市長にはなれないかもしれないけれども，ジョージアの州知事にはなれるかもしれない．日本ではこんな考え方はあり得ない．逆ですね．県知事にはなれなかったけれども，どこかの市長選挙ぐらいなら，何とかなるかもしれないという．その反対なんです．それで2回アトランタ市長選に出てだめで，3回目に，今度は州知事の選挙に出ようと思っていた矢先に，64年に公民権法案というものができて，ジョンソン大統領がサインをした．サインした翌日から発効したのです．

マドックスは人種差別主義者ですから，彼のレストランは white only です．そこでこの公民権法が明日から実施されるというときに，アトランタの町の中の公民権団体が戦略的に，よし，それならばマドックスのレストランに行こうじゃないか，あいつがどんな態度をとるか，公民権法が発効した翌日一つのテスト・ケースとしてやろうということで，それをラジオやテレビや新聞社に，何時何分にテスト・ケースとして黒人が入っていくぞと全部通知した．そうしたら大勢のマス・メディアの人が来て，テレビまできて待っていたわけです．

さてどんなことが起こったかといいますと，黒人が3人ぐらい入っていったのです．そのレストランに入った最初の黒人です．そうしたらマドックスはピストルを持って出てきた．マドックスの息子は斧を持って出てきた．そして，おまえたち帰れ，絶対来るな，といって突きつけた．その場面はその日の夕刊や，夜のテレビのニュースで全国的に流れた．それで彼は一躍有名になった．

アトランタの町では市長選挙に出たからもちろん有名です．それからジョージアの人だって，一番大きな町の市長選挙に出ている人間というのですから，ぼく然と知っているけれども，州境を越えたら彼の名前はその時まで全然わからなかったのです．彼はもちろん公民権法違反第1号です．そのときの司法長官はロバート・ケネディでした．ロバート・ケネディを彼は恨むこと恨むこと．私の敵といってあげている中に，キューバのカストロ，それと並んでロバート・ケネディ，キング牧師，それとアトランタの新聞の，非常に liberal な白人であった編集長の名前をあげて，彼は攻撃している．罰金10万ドルぐらいになってしまうのです．公民権法違反というのはよほどきついものだったのですね．

彼はレストランを売らなければ罰金が払えないのですが，そのレストランを売るときに，彼は奥さんと長女と3人並んでテレビの画面に出てきて，マルコ伝の一節を読むのです．私は正確に覚えていませんけれども，「もしこの家を奪おうとしたら，その家の主人をまずしばってからその家を奪うべし」というようなことばがある．それを読むわけです．そうすると画面で奥さんと娘さんが泣いている．それで猛烈に同情がわいて，彼のところにしっかりやれということで，続々とお金が送られてく

る．そして彼は66年に州知事に当選するのです．いまからわずか12年前です．その段階で南部がまだどういう精神構造にあったか，ということがおわかりになるでしょう．

その当時全部の州ではありませんが，アメリカの州の3分の1か4分の1ぐらいは，州知事の再選を禁止している．これはアメリカの一つの考え方，同じ人間が同じポストに長いことといると，人間が悪いのではなくて制度が悪いために，必ず水がよどんで，利害関係が結びついてきて，政治が腐敗するという．だから州によっては再選を禁止しております．

そのため彼は4年でやめなければいけない．やめるまぎわに彼は州の法律を変えようとしたのです．再選でもいいように変えようとしたけれども，だめだったわけです．隣のアラバマ州も同様です．ですからアラバマ州では，ジョージ・ウォーレスがやめるときに，奥さんをたてて州知事にした．そのときの選挙のスローカンがひどいのです．奥さんがラリーンとかいいましたが，「ラリーンを当選させてジョージにやらせろ」というのです．それがまかり通って当選しているのです．マドックスのときはそこまでいかなかったけれども，4年間休んだあとでまたやるのならいいのです．休むといっても，同じポストにいなければいいのですから，彼は副知事に立候補する．副知事なら選挙運動もやりやすいですから，副知事で4年間やっていて，4年後に州知事に返り咲こうとしたわけです．カーターさんは70年の選挙で当選し，71年から州知事をやるわけですが，その副知事は前知事ですから非常にやりにくかったはずです．

たとえばカーターさんはこういうことをやりました．その州の功績があった人たちの写真を，州庁舎に飾るのです．ジョージア州というのは，一番多いときには，40％ぐらいが黒人だったにもかかわらず，黒人は一人も額に出ていない．そこでカーターさんは州知事になってからキングさんの額を掲げた．そうしたら副知事のマドックスは非常におこって，「よし，いまにみろ，この次はおれがまた州知事になるのだ，そのときにはキングの写真なんか引きずりおろしてやる」といったとかいうことです．だからいかにカーターさんとマドックスがうまくいかなかったかということ，それから，カーターさんのやることを彼がいかにコントロールし，牽制しようとしたかということが，おわかりになると思います．

## カーター大統領の生い立ち

さて，今度はカーターさんのことをお話しすることにしましょう．カーターさんは1924年にジョージア州で生まれたわけですが，そのころはアメリカの南部も依然としてひどいときでした．彼の生まれたところというのはすごいところです．ほんとうに農村も農村，自動車を相当なスピードですっ飛ばしても，人家があまりないようなところです．カーターさんの住んでいたところは，白人が2世帯，黒人が20世帯ぐらいの田舎です．

白人が2世帯で，黒人が20世帯だとなったら，これはもうみんな一緒です．ましてや小学校に入るまでの子供は，白人の子供2人だけこっちでポツッと分かれているはずがない．みんないっしょくたになって遊ぶのです．そういうふうに考えてみると，『風と共に去りぬ』なんか見たって，ちょっとおかしいなと思うところがある．なぜかというと，白人の家庭に黒人のメイドが入ってきて，食事をつくったり，乳母になって乳飲み子を養ったりするということがある．そういうことに対しては，アレルギーを感じないでいるというところがあるわけです．そうすると，差別がありながら，白人と黒人のスキンシップは南部のほうが近いという，おもしろいところがあるのです．

こういう話を聞きました．南部の黒人が，北部はいいぞという話を聞いて，北部へ行った．そうしたら少しもよくない．北部だって相当ひどいということがわかって，失業して，南部へトボトボ歩いてきた．途中で食べ物がなくなった．そこで北部の白人の家へ玄関から入っていって，「すみませんがパンを1つくれませんか」といったら，「いま私たちはちょうどパーティに出かけるところで，忙しいので相手をしていられない」といって，丁寧に断わられた．ことばは丁寧だけれど，パンひとつくれなかった．今度は南部へさしかかった．南部の白人の家の玄関へ入っていこうとすると，nigger といってどなられた．「なにか食べ物がほしいなら，表じゃなくて裏へ回れ」とどなられて，裏へ入っていったら，たくさん食べ物をくれたというのです．

これはちょっとできすぎている話ですけれども，しかし南部と北部の差にはそういうものがある．だからそれを表面的にとって，玄関から入れる北部の白人が liberal で，裏口へ回らせる南部の白人が conservative だ，racist だといえるかどうかというのは，ずいぶんむずかしい問題ですけれども，とにかくそういう差があるのです．

それからカーターさんは農村からちょっと離れたところの，プレインズという町に来るのですが，このプレインズという町でも現在人口600人ぐらいですからね．ダウンタウンらしいものは全然ない．強いていえばダウン

タウンらしいところが1つあります．そこに売りもの屋が5，6軒並んでいて終わりというところです．それだけの町です．そういうところでもやはり子供たちは，小学校へ行くまではみんな一緒になって遊ぶのです．ところが小学校はだめなんです．行って初めてわかるのです．学校は別々です．

彼はとにかくそういうところで過ごしてきた．そしてこういうところにいるのがいやになって，お金があまりなかったものですから，お金がなくて入れる学校というので，海軍兵学校に入る．そこで海軍の士官になる．海軍で世界をあちらこちら回ってくる．海軍の士官学校の4年間を入れて，合計10年間たったときに，ピーナツ畑をやっていたお父さんが死ぬわけです．そして彼は53年に南部に戻ってくるのですが，その翌年の54年に最高裁のたいへんな判決が出るのです．黒人と白人は，public school では，一緒に教育しなければいけないという判決です．そして南部がこの年以来大混乱に陥るのです．あちらこちらに共学紛争が起こったりする．

ケネディ時代の一つの話をしますと，フォークナーが死ぬまでずっといた，オックスフォードという小さな町に，University of Mississippi があって，白人しか入学を許可しなかった．そこへ1人の中年近い，朝鮮戦争で戦闘機のパイロットだった黒人が入ろうとした．これは62年ですから，この共学判決が出てずっとあとです．申し出た以上は受け入れざるを得ないのです．受け入れようとしたら，白人の学生が集団でそれを阻止した．そこでそれを何とか守らなければいけないというので，司法長官ロバート・ケネディが連邦の保安官を出動させて，この黒人の学生を保護したわけです．

そうしたら今度は，それを知った町の人たちが2,000人ぐらい暴徒になってしまった．そしてライフル銃を持ち出したり，ガス銃を持ち出したりして，今度は連邦の保安官と対決する．連邦の保安官がたてこもった大きな建物があるのです．そのまわりをずっと白人の暴徒がとりまいたのですが，そのときに中に閉じこもった連邦保安官の司令官が，司法省へ電話するわけです．ロバート・ケネディが，一体どんな状態だと聞くと，彼はこれではちょうどアラモのとりでと同じです，という返事をしたのです．このままでは連邦保安官が全滅すると．そんな大騒ぎをしたぐらいです．そういう紛争の原因になった最高裁の判決が出る前の年に，カーターさんは南部へ帰ったのです．

南部へ引っ越してきたカーターさんの身にはいろいろなことが起こりました．たとえば KKK ではないけれども，KKK にお金を与えているような白人の団体があるのです．白人市民協議会といいましょうか，White Citizen's Council という団体があって，これは州知事から実業家からみんな入っているようなところ，こういうところから彼のところへ，プレインズへ引っ越したあと，入会の勧誘にやってくる．その町の教会の牧師さんと警察署長が，勧誘に来るわけです．警察署長が人種差別主義者なんですから，公民権運動家が暗殺されたって，犯人がつかまるはずはないのです．カーターさんはそれをけるのです．またあとでちがう顔ぶれの人が来て，入れというのです．それをまたけってしまう．どんなことが起こったかというと，彼はピーナツ畑の経営に対する村八分的ボイコットみたいなものを1年間やられたのです．

それからカーターさんが所属している，プレインズ・バプテスト・チャーチに黒人が2人入会を申し込むのです．そうするといままでの白人だけの信者が集まって，その入会を許可しようかどうかと相談するときに，許可したらいいだろうという返事をしたのが，2つのファミリーだったそうです．その1つがカーター・ファミリーです．あとはみんな反対だったものですから，多数決でカーターさんは負けて，その黒人は教会へ入れなかったのです．

## 『ジミーってだれだい』

以上の2つの事件から考えると，カーターさんは非常に liberal のように思うでしょう．もしすべてがそれと同じように liberal だったら，彼は州知事になれないのです．まして大統領になれないのです．カーターさんが一面においてそういう liberal な点を持っていたということは，小さいときに，自分の生活環境が黒人と一緒だったために，一部の人が感ずるような，黒人に対するアレルギーというものがないのだと思うのです．だから彼は州知事になってからキングさんの写真を飾るようなことを，平気でやるのですけれども，そうかといって，すべて人種差別主義者を攻撃し，黒人をあまり持ち上げすぎると州知事に当選しないことは，彼はわかっているわけです．

なぜかというと，前にレスター・マドックスのような人が当選しているのですから，この人が州知事である段階において，彼は選挙運動をやらなければいけないのですから，選挙運動やっている最中は勝つためにはいろいろなことをやるのです．いろいろなことをやる一面をみると，彼はずいぶん conservative な，場合によっては彼の対立候補よりも conservative じゃないか，と思う

ような面がいくらでも出てくるのです．そうすると外部の人はわからなくなってしまう．

たとえば，ニューヨーク・タイムズの新聞記者が，カーターさんのことを書こうとすると，一体，右か左か，保守か革新か見当がつかない．その見当がつかない人が書いたのを読むのですから，みんな見当がつかないのです．だからカーターさんが大統領候補になろうとして出てきたときに，カーターさんについて書かれた本が，『ジミーってだれだい』というタイトルだった．これが全米で読まれる．わかりっこないです．政治家というのは勝たなければいけないのです．

古い話になりますが，リンカーンは「私が当選したら奴隷を解放します」なんて，選挙戦のときには一言も言わないのです．なぜかというと，それを言ったら当選しないだろうということを，彼はわかっていたからなんです．絶対それを言わない．そして上院議員選挙のときに相手の人との公開討論会を，７つの場所でやるのですが，南部寄りのところでやるときは，少し南部に都合のいいようなことを言ったりするのです．それぐらいのことをやって，彼は大統領に当選した．当選してやりたいことをやってしまったのです．そのために暗殺されましたけれどもね．けれどもこのほうがプロの政治家ではありませんか．政治家というのは当選しなければならない．だから自分のやりたいことを，いまずばっと言ったら当選しないと思ったら，それを引っ込めて，妥協しながら選挙戦をやる．しかし勝ったらやってしまう．

カーターさんのことをそれにたとえていうのは，まだわかりません．まだ彼は大統領になってからそう長いことではないから．けれどもその後のカーターさんのやり方をみていて，少し思い当たるふしもないではない．たとえばパナマ運河の問題です．パナマ運河の問題なんていうのは，アメリカのタカ派は大反対です．せっかくあそこにアメリカが利権を取って，ずっとアメリカがその利権を持っていることによって，どれだけ得するか，アメリカが両洋艦隊を持たないですんだのは，あそこにばく大なお金をかけて，運河をつくったからなのです．その利権をもう地元に戻そうなんていうことを，カーターさんが言い出したのですから．

けれどもカーターさんは，ことによると，もっともっと先を読んでいるのかもしれない，という気がするのです．それはどういうことかというと，がんばってパナマを持つことと，パナマを地元に放棄することとの，長い目でみた損得勘定です．中南米の反米感情というのはすごいのです．どうしてそうなったかということは，話していくと歴史的にたいへんなことですけれども，そうなるのが当然のようなことを，アメリカはいままで中南米諸国に対してやってきているのです．その中の１つがパナマです．だからパナマを放棄することによって中南米の対米感情は非常によくなるだろうと思います．

しかもいまは国連政治の時代です．国連で１票を投じているというのは，中南米の山ほどある国が，どっちへつくかということによって，とんでもないちがいが出てくるのです．たとえば中南米が全部反米になって，キューバみたいになったらということを考えたり，中南米が全部親米派になると考えたりしたら，国連の票が，それで運命が変わるぐらいのちがいが出てくる．なぜかというと，プラスＸとマイナスＸでは，Ｘの倍だけの数が出てきますからね．ですから世界の運命がそれによって変わるかもしれない．そういうことまで考えるような資質というのでしょうか，性格というのでしょうか，それはカーターさんのどこかにあるのです．

それはカーターさんが，非常に熱心なクリスチャンであることも，関係があるかもしれませんし，それから人権，私は黒人，黒人といっているけれども，結局黒人の問題というのは，人権の問題なんです．だからカーターさんが人権外交と言い出したのも，人権の問題が，自分の子供の時代から，いやというほどまわりに取りまいていた環境で過ごしてきた．そしてカーターさんのそのときの相手は黒人だけでした．白対黒です．

しかし大統領になった場合の人権という問題は，今度は第三世界の問題とか，とても大きく広がってくるわけです．それから第三世界だけではなくて，その国の中における反体制の人が，自由を持っているかどうかという問題になってきたわけです．ですから韓国の問題なんか考えてみても，韓国のいまの朴政権のやり方に対する反感は，アメリカの政府のほうが，日本政府よりもはるかに強いのです．ですからアメリカの政府では，議会がどんどん韓国のアメリカ議会に対する不当な介入というものを調査しているでしょう．ところが日本では全然これはやらないのです．それはおそらく，福田さんとカーターさんのちがいでしょうし，カーターさんが生まれつき持っている，人権についての感覚というものが，たとえばソ連の国内なんかに対しても言っていくことは，内政干渉であり，over commitment であり，そしてそれはやがて反発を招いて，損をするという面がある．あるにもかかわらず，彼が十分捨てきっていないというのは，やむにやまれず彼がやっている，というような性格があるかもしれないし，あるいは戦略的にもっと先をみて，その国連の議場での票とか，第三勢力に対する平等の感覚，というものとの結びつきがあるのかもしれません．

## 変わりつつある南部

そこで，南部がいま変わりつつあることの一つの証拠として，マドックスはその後どうなったか．マドックスはカーターさんがやめたとき，すなわち75年のgovernorの選挙に打って出て，めちゃくちゃに負けました．いま何をやっているかというと，アトランタのダウンタウンのナイトクラブの主人公です．

同じジョージア州の前知事とそのあとの知事，前の知事はもう政治的に過去の人になり，そのすぐあとを継いで知事になったカーターは，アメリカだけではなくて，世界全体の運命を変えるような，合衆国の大統領になっている．ということは，少なくともそれを見分けて，アメリカ国民，特に南部人が選んでいったのですから，その南部人の感覚が相当変わってきたと，私が一番最初に話した南部人の特色が，少し平均化されてきたといえるのではないでしょうか．

だからいま言われていることは，"Americanization of the South"（南部のアメリカ化），それから逆に，"Southernization of America"（アメリカの南部化）．アメリカの南部化というのはどういうことかというと，1つだけ例をあげると，黒人が大勢北部に移動していったわけです．そうしたら，かつては人種差別が南部だけだと思っていたのが，北部へ黒人が行ったら同じだった．特にバス通学の問題では，ボストンをはじめとして，北部のほうでよけいトラブルが起こっている．それから，どうも南部のほうが住みいいのではないかというので，最近，いったん北部へ行った黒人たちが，相当また南部へ戻りつつあるということもあります．だから南部と北部の性格は，かなり接近しているのですが，まだまだ十分接近しているとはいえません．

2,3の例をギャラップの世論調査でお話ししましょう．「もしあなたの支持する政党が，女性を大統領候補に選んだとしたら，あなたはその人に投票しますか」という，ギャラップの2年前の世論調査があります．それでyesと答えた人が，東部では77％，中西部では74％，西部では83％ですが，南部では63％というふうに，ガタッと下がっているのです．

それから，「教会にどのぐらい信頼を置いていますか」という質問に対して，うんと信頼を置いていると答えた人が，逆に南部が一番多くなっているわけでして，ニューヨークなんか大都市のある北東部は37％，中西部が44％，西部が31％，西部は教会に対してあまり信頼を置いていないのです．これが南部は58％です．ひとけたガタッと，何となくちがうというムードがあります．

それをあげていけば同様なことが沢山あるのです．「宗教は現在の問題を解決できると思うか」というような質問に対して，解決できると答えるのは，北部が51％，中西部が66％，西部が57％に対してなんと南部は73％です．「もしすべての若者が，1年間国家に奉仕しなければならないとしたら，それはmilitary serviceにすべきか，non-military serviceにすべきか」という質問に対して，military serviceにすべきであると答えたのは，南部が圧倒的に多いのです．大体そういういくつかの例をあげると，何となくおわかりになるのではないでしょうか．禁酒法を，いまからでも実施すべきである，と考えている人は，南部が一番多いのです．

私が始めて南部で暮したときに，私が住んだ郡はそのとき，禁酒法を実施していました．びっくりぎょうてんしました．それを知らないで引っ越していって，酒屋をさがしたらどこにもないのです．ところがそこはよくしたもので，禁酒法を実施しているというのは，製造及び販売を禁止するのであって，ほかから買ってきて飲むということまで禁止していないのです．だからcounty limitという郡境があって，そこを越えると最初の店は大抵酒屋なんです．ただしそういう酒屋は大抵高いのです．足元を見越しています．だからもっとずっと奥へ行って，町のまん中へ行ったついでに買ってくるという，南部はそれくらいはっきりしているのです．

しかしながら南部は相当変わりつつある．けれども全部変わったのではなくて，まだ依然として，均質化するためには何十年もかかると思うのです．その変化が始まった段階であって，まだ変わり終わったのではない．だから新しい面もあれば古い面もある．そしてカーターさんはその中で，かなり新しい面をよけいに持った政治家である，といえるだろうと思います．そうでなければDeep Southの政治家が，全米の選挙で当選するということは不可能だろうと思います．

こういうことも聞きました．たとえばDeep Southでliberalだというような人は，全米的にはmoderateぐらいにしかならないという．ですから，全米的にmoderateである人は，南部へ行くと，過激派とまでいかなくても，進歩派ぐらいにはなるということでしょうか．いま南部はまさしくその過渡期にあると思います．

あまりうまく話せなかったかもしれませんが，大体私の話をしているムードをおわかりいただければ幸いだと思います．

（東京女子大学教授）

（1978年3月31日，ELEC英語研究所で開催されたアメリカ研究コース公開講座の速記から．）

# NATIVE AMERICANS

山 本 昭

ピューンと風が吹く．バラバラッと砂が落ちる．眼を開けると，赤茶けた丘の麓に点々とバラックが立っている．ビューと砂が舞う．眼の中に砂塵が飛び込む．口の中がザラザラと気持が悪い．出ない唾を無理にペッと吐く．茶色っぽい，粘々の塊が地面に落ち，パッと砂ぼこりが立つ．華氏100度に近い炎天下である．木陰を求めようにも，人を一人庇ってくれるような大きな木は見当たらない．普段うじゃうじゃいる犬の姿も，まばらだ．肋骨が1本，2本とはっきりと数えられるやせ犬がチョロッと姿を見せる．出る汗はまたたく間に乾き，顔がヒリヒリする．シャツの裾で顔をなでると，ザラッと音を立てて茶色の粉が落ちる．

これは，あるアメリカン・インディアン部落での夏のある日のことである．私は，別に荒野の真ん中に立っている訳ではなく，このインディアン部落の家が立ち並ぶそのほぼ中央に立っているのだ．私は夏になると毎年この部落に出かけて行く．インディアン語の研究のためである．現在までに多少とも研究されているアメリカン・インディアン語は200語以上ある．その中で，今でも生活の大切な役割を果たす，生きた言語として生存している言語は少なくなってしまった．英語とかスペイン語など，征服者の言語に取って代わられている．数年前までは，まさに滅び行く言語であった．私の行く部落の人々はインディアン保護地（Reservation）に住んでいる．人口約1,000人の部族である．家庭で祖父母と生活を共にする子供たちは家の中ではインディアン語を話し，学校その他の家の外では英語を使う，という二重言語生活をする．しかし，徐々に英語が増え，生活もまたインディアンから離れて行くのが趨勢であった．

我々が知っているのは，ジョン・フォードが作り出す西部劇に代表されるインディアンたちであろうか．それは残忍な殺し屋であろう．しかし，一体何故彼らインディアンは白人に反抗的なあの態度に出たのか．

ヨーロッパ人がアメリカ大陸に入り込むずっと以前から，天・地・海の恵みを生活の糧として，自然を愛していたインディアンであった．我々日本人にはよく理解出来る「自然は神々の住み給う所であり，人間はその自然の一部でしかなく，また自然は克服するものではなく，調和していくものである」という考えが，彼らの根底にある．その愛する土地を買収され，武力で追い払われ，キリスト教の名の下に奪われてしまった．土地を失うことは，即ち祖先から伝わる伝統文化・生活を失うことを意味した．このような時，人は一体何をなすのだろうか．私の行く部落の人々もまた，何も育たないようなやせた土地を与えられ，細々と生命をつないできた．

アメリカは Melting Pot である，と我々は教えられてきたが，それはヨーロッパ系の移民が同和しようとした社会を意味したに過ぎず，その中にはインディアンも，黒人も，東洋人も含まれてはいなかった．時には pressure cooker 的な努力で，インディアンを Americanize しようとしたこともあった．全寮制の小学校を作り，何十マイル，何百マイルも離れた所からインディアンの子供たちを連れて来て，英語だけの生活を強制したこともあった．

しかし，1960年代から公民権運動が盛んになり，Melting Pot の時代は終わった．黒人，インディアン，その他のもろもろの少数民族や Minority Groups が，それぞれの権利を主張し始めたのである．その結果，1960年代後期からアメリカの未来像は Pluralism であると考えられるようになった．二重言語・二重文化教育はその一つの現われである．それぞれの民族の伝統文化・言語を子供たちに伝承させると共に，彼らの属する大きなアメリカ社会の文化・言語も同時に伝え，アメリカの市民であることに誇りを持ち，且つそれぞれの民族に属することに誇りを持たせようとする努力である．私の行く部落でも，伝統文化・言語を復活させ，保存させ，子供に教えようと，二重文化・言語教育センターが設けられた．アメリカン・インディアンの言語は文字の伝統が無いものが多く，この部族も例外ではない．まず，文字を創る必要があるのだが，誰にでも一夜にして出来ることではな

い．言語の体系の理解がなければならない．しかし，彼ら部族の過去の経験から，外部からの「よそ者」に対する不安感，不信感には想像以上のものがある．我々言語学者も，実は政府の手先で，また何かしでかそうとしている怪しげな人物と見られることが多い．

昔の話になるが，戦争中アメリカ軍は秘密情報を守るためにインディアン語の一つであるナバホー語(Navajo)を使った．敵国日本人にはどうしても解読出来なかった，という話は有名である．私が初めてこの部落に入った時，まずささやかれた言葉は，「あっ，スパイに来たぞ！」というものであった．長老たちに一堂に集まってもらい，一大説明会を開き，私が何のために部落に入りたいのかを説明しなければならなかった．どうにか信用を得て言語研究に入ったのであるが，文字の作製に2年を費やし，今ようやく英語との対照教材作製に一歩踏み出したところである．

これまで，“アメリカン・インディアン”と書いてきたが，彼らをそう呼ぶのは少々時代遅れである．現在では，“ネイティヴ・アメリカン”(Native Americans)と呼ぶ．すなわち，ヨーロッパ人が移住する以前から居る土着のアメリカ人ということである．アメリカの社会にPluralismが達成出来るまでには，この先何年もの年月がかかるであろう．その間には，この呼び名で代表される種々の差別が生まれては，また消えて行くことであろう．ことに，Native Americansは，まず自分たちの力で伝統文化・言語を復活，保存させるために，一時的に排他的・閉鎖社会になる可能性がある．Native Americansのインディアンとしての誇りと自信を取り返すための一過程である．そこに我々言語学者の成す仕事が待っている訳で，我々が果たす役割は微妙，かつ重要なものである．

インディアンの友人の女の子と

**(カンザス州立大学助教授・人類言語学，アリゾナ州の Walapai 語の調査研究に従事)**

---

(p. 17よりつづく)

ている限りはなかなか英語に対する興味が出てこないのではないかという気がするのです．

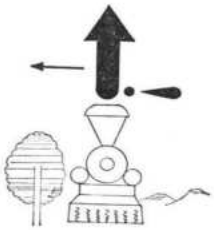
具体的には2年生の夏休みあたりに，やさしい物語のテキストを全生徒に与えます．決して強制的な課題として出すのではないのですけれども，「夏休みに寝ころんで読んでみないか，読んだら感想でも質問でも何でもいいから手紙で送れ」ということで夏休み後半になって郵送させる．去年は2年生の中で50％返事をよこしました．感想の中に印象強く残っているのは，英語はただ学校のテストとか，高校の入試のために勉強するのではないということがわかった．教科書以外のものを読んで自分の力で英語が読めたというのはうれしいことだというような感想を送ってよこした子がかなりいました．

先生は生徒個々のレベルを考えて丁寧に教えるということはするかもしれないけれども，もうちょっと積極的に自分の力をもとにして教科書とはちがう英語も読ませ，英語を通して読んだときの喜びというものをもっと味わわせる必要があるのではないかということを感ずるわけです．

**大貫**　非常に大事な点ですね．先ほど中田先生おっしゃった，要求水準を低めた場合に逆に非行に走ったということ．つまり個人差に応じた指導というものがえてして低いところに焦点を合わせるために，結局上位の中に欲求不満を起こさせてはいけないですから，いま下村先生おっしゃったように，力のあるものに対してはそれなりにきびしい課題を与えていく必要があると思います．

**下村**　ぼくは，「中間考査や期末考査を，楽しみながらやりなよ」とよくいうのです．「教科書の内容よりはずっとおもしろいのを出すから」といって，必ず教科書とはちがったストーリーのおもしろいのを出すわけです．そういうふうに習慣づけていくと，今度は試験にどういう内容が出るか楽しみながら待ってる生徒もいます．いわゆる文法的な，それこそIsolated Sentenceだけを取り出して，こまかい文法的などうのこうのというばかりではなくて，あまり試験に対しての抵抗を感じないような方向にもっていきたいと思っているのです．私なりにやっていることの1つです．

# 座談会　英語を好きにさせる指導法



中　田　実　東京都新宿区立戸山中学校教諭
大貫　辰雄　東京都杉並区立松の木中学校教諭
菊地　君子　東京都江東区立深川第八中学校教諭
(司会)下村勇三郎　東京学芸大学付属竹早中学校教諭

## 英語ぎらいの実態

**下村**　『英語展望』(61号)の「英語を好きにさせる指導法」という特集の「英語ぎらいの実態とその対策」の中に，茨城県の谷田部中学校の実態調査がありますけれども，これをごらんになってどうお感じになったか，そんなところから話し合ってみたいと思います．

実態調査を見ますと，「英語の授業で楽しく感じるのはどんなときか」という質問に対して，聞く・話す・読む・書くという領域についての子供たちの反応は，1年から2年，3年と進むにつれてだんだんと楽しくなくなってきている．

それから「これからの英語学習について，どういう希望を持っているか」という問いに対しては聞く・話す，というのが1年生では圧倒的に多いのですけれども，2年生になってやや少なくなって，3年生になるとぐっと少なくなっちゃいまして，逆に学習のしかたを身につけたいとか，テストに強くなりたいというのがはっきりと多くあらわれている．こういう実態調査をごらんになって一体どういうことがいえるのかということについてご意見たまわりたいと思います．

**菊地**　楽しいというのはつまりわかるということだと思うのです．3年になれば家庭学習の時間がふえますので，私の学校の現状から考えて，楽しいと思う生徒がふえると思うのです．この資料によりますと，3学年で楽しいと感ずるときはないという生徒がかなりふえているのですけれども，これはちょっと予想外なんです．

**中田**　この調査結果を見て，びっくりしたというよりも，「やっぱりね」という感じが強いのです．教えていて，1年生のときは目を輝かしている子が，3年ぐらいになると....ということを何年も経験しているわけですから，やはりこれは事実だと思いますね．

**下村**　たとえば1年生あたりだと，聞く・話すというのがどうしても実際の授業の中で多く使われるだろう．そうすれば生徒も，英語の学習というのはそういうものだということでついてくる．あるいは喜んでやる．2年生，3年生になって，指導の形態が変わってくるに従って，だんだんと聞く・話すという授業形態が少なくなってくる．そうなってくると学年を追って，聞く・話すの領域よりも，読んだり書くほうへ目が向っていく．

一方においては高等学校の入試というものがだんだん迫ってくると，その入試に強くならなければいかんというようなことが生徒の興味とか関心に影響を及ぼしていく．そこで領域別にみた場合，生徒の楽しく感ずるときとそうでないときということについてはどうなんでしょうか．

**菊地**　この表を見て最初に思ったのですけれども，1年，2年，3年と，授業形態というのはそう変わるものなのかなという疑問を持ったのです．私の場合ですと1年も2年も3年もある程度同じ形をとっておりますので，果たしてoralの部分を少なくすると生徒の成績が上がるのかということもちょっと不思議に思いました．

**下村**　聞いたり，話したりする言語活動は1年，2年，3年と数量的にはそうちがわないのではないかということですね．

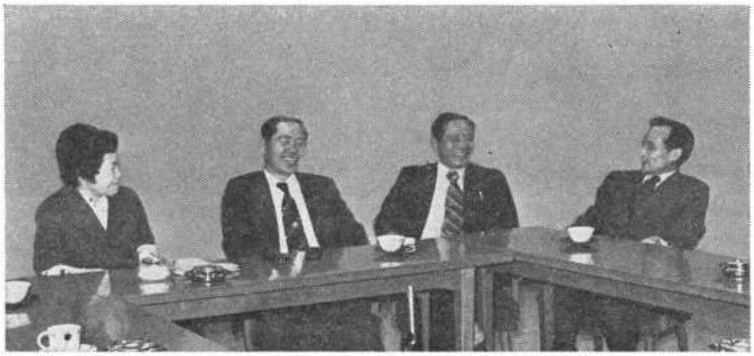
**菊地**　そうです．

**下村**　いかがですか中田先生．

**中田**　生徒たちが何がわからないのかの調査をしてみるとおもしろいと思うのです．聞く・話すがむずかしいのか，それとも単語がむずかしいのか，文法がむずかしいのか．

**下村**　いわゆる音声を通した言語活動の面が学年を追って子供のほうからみれば楽しみが少なくなってきているような数字があらわれているわけですね．実際はどうなんでしょうか．

**中田**　3年生ぐらいの文章を意味がちゃんとわかって話せるようになるということは，たいへんなことなのではないですか．もしあのくらいの内容が英語で読んだり聞いたりできたら，相当な実力を持っているといえます．



左から菊地君子，大貫辰雄，下村勇三郎，中田実 各先生

**下村**　中田先生のおっしゃることは，3年生レベルの教材を話したり，聞いたりするというようなところまではむずかしい．そういう面で興味を持たせるということはたいへんなことだということになるわけですね．

**中田**　だと思います．自分自身でいくらやってもうまくいったためしがないのですからね．

**下村**　この調査の結果から編集部のほうでは，「生徒の興味が，話したり，読んだりすることから，次第にテストの成績向上のほうに移行している」ということは，生徒の学習目標が好ましくない方向にいっているのではないか，ということを言っていますが，この点はどうなんでしょうか．

**菊地**　やはり現実としてあるみたいですね．だけど，少なくともテストの成績を気にすれば生徒は勉強するのではないかと思うのです．

**下村**　やはりテストの成績を上げよう，上げようという方向へ彼らの目標がいっているということがいえますか？

**菊地**　と思います．

**下村**　よく話せるとかいうことに対してあまり関心がなくなってきているということですか．

**菊地**　それはちがうと思います．

**中田**　そうはいえないですね．やはりテストの成績も上げたいし，それから聞く・話すこともできるようになりたいというのが普通の一般的な生徒の望みだろうと思うのです．

**下村**　調査結果では1年，2年は，「話せるようになりたい」それから「聞き話しができるようになりたい」というのが6割から7割あります．3年になるとずっと少なくなって，「聞き話し」のほうは17％とか，「読み書き」は5％になっていて「学習のしかたを身につけたい」とか「テストに強くなりたい」といっている．これはどういうふうにお考えになりますか．

**中田**　ただこの「学習のしかたを身につけたい」というのも，学習のしかたというものの解釈によると思うのです．「正しい英語の学習のしかたを身につけたい」というのだったら当然聞くことも話すことも入るわけですからね．ただこれはそうではないようにとれるような気がするのですけれども．

**下村**　ぼくもここのところちょっとはっきりしなかったところなんです．「学習のしかたを身につけたい」というのは，いい線いっているんじゃないかというふうにぼくはとったのです．英語の学習なんていうのはほかの教科とちがってなかなか自学自習できにくい教科でしょう．音声を伴う教科だけにね．いかに教育機器が発達してテープレコーダーを各自持てるようになったからといって，自学自習で音声の学習まで含めたらなかなかたいへんです．それを全部ひっくるめて学習がうまくいけるかどうかということになったら，これはむずかしい．どの子だって，読むほうも，書くほうも聞くことも，話すこともやろうとしたら，どういうやり方が能率的かと悩みを持つのはあたりまえだし，またいい傾向ではないかととったのです．ただ3年になると，「聞き話しができるようになりたい」というのがぐっと少なくなっているので，そことの関係がちょっとややこしいのですがね．

しかし，この実態調査にはかなり共鳴できるところもあるし，また一般的にはこれに近いことが，多くの中学校の実態のような気もする．また，りっぱな先生，教え方の上でもくふうなさっている先生のところでは英語ぎらいを防げるということもありそうな気がするのです．

## 英語ぎらいと指導法との関係

**下村**　ところで，指導法と英語ぎらいの関係について少し話し合ってみたいのですが，同じ学校で何人か英語

大貫辰雄先生

の先生いらっしゃる，そうすると，その生先方は同じやり方で教えているとは限らないわけですね．そういうことで生徒における反応，あるいはあの先生に教わったらきらいにならない，楽しい．あるるいはあの先生に教わるといやだ．そういうふうな，同じ学校の中でも指導法がこんなに影響するものかというようなことをお感じになるようなことはないですか？

**菊地**　ありました．1人ベテランの先生がいて，その先生3クラス教えられて，私が1クラスだけ受け持ったのです．私はかなりペースが早くて，わりとoralを重点的にやっていて，やる量がかなりあったのです．

もう1人の先生は，黒板は丁寧に3回ぐらい全部消して書き直してくれる先生でして，あらゆるものを書いて教えるような先生でした．ゆっくりしたペースです．進度もかなりおそかったのです．それで結局私の早いペースのほうが中間・期末，あるいは実力テストの点数などもよかったようです．

私が教えたのは2年生で，3年生になって元の先生に戻ったのですけれども，その生徒が卒業してから言うのに，2年のときは英語がわかったというのです．3年になるとペースがおそくなってわからなくなったという．やはり授業中に多くの英語に接することがある程度大事なのではないかなと思いました．

**下村**　ということは，わかるということは成績を上げるだけではなくて，英語への興味とつながってくるということでしょうね．だから同じ学校だってあるということ，それから地域差の問題でないということを考えてくると，中学校の段階では特に指導の方法というものが大きく左右するといえないでもないような気がするのですが，中田先生なんかもご経験あるのではないですか．

**中田**　菊地先生のお話をうかがって，やはり菊地先生と生徒との関係がもう1人の先生とだいぶちがうのではないか．その辺も大いに原因があるような気がします．

**菊地**　先生によって生徒は教科の好ききらいをきめますからね．私個人のことは別にして，先生の態度というものが大事ですね．

**中田**　そうだと思いますね．中学生というのはまだおとなじやないですから，動物的な嗅覚を持っているのですね．先生が好きだったらその教科は好きだ，先生がきらいだったらその教科もきらいだ，そういう判断しか下せないと思うのです．

**下村**　先生によって好きになる，きらいになるということは，なにも英語だけの問題ではないのですね．教師と生徒との関係，人格論まで出しちゃうときりがないので，特に英語の授業に関して，英語を好きになる，きらいにならないような具体的な指導法についておっしゃっていただいたらいいと思うのです．

**大貫**　私どもの学校でも，従来，校内でいろいろ指導法のちがいがあった．それで授業の持ち方をくふうしてみたことがあるのです．たとえば週に4時間ある．そうすると，指導法的な面でややまだ研究の余地があると思われるような先生の場合，3と1というふうな持ち方で横に持ってお互いに相互研究し合う．そういうことで取り組んでいって，1年たったところ，非常に勉強になったということをその先生からいわれたことがあったのです．そうすることがお互い自分の指導の力量を高めるというか，非常に力になっていくのではないかと思いますから公式的にあの先生は力が足りない，父兄からいろいろな批判がある，それをただカーテン越しに論じ合っていたのではお互いに前進しない．子供を材料にしながらざっくばらんに話し合う条件づくりが大きな前進につながってくるのではないかと思います．

**下村**　要するに校内での教師のお互いの研修会，ほんとうに腹を割って子供のつまずきを話し合ったりしながら先生の個人差，あるいは指導の差というものを補充し合っていくというふうなことができるわけですね．

**大貫**　ことしは1年と2年については，1つの学級を2人で2時間ずつというような持ち方を考えてみたのです．

## 「わからせる」授業

**下村**　いま教師間の問題ということで話し合ったわけですが，さきほど「わかる」ということが前提になるのだという話がありました．わからせるためにはどういうくふうがあるかというようなことが具体的に次に必要になってくるのではないかと思うのです．『英語展望』の中にも何人かの先生方がいろいろくふうされているようなことを書かれてありますけれども，こういうものも含めて実際のご経験なんかについて話し合っていただければと思います．

**大貫**　いま「わからせる」というお話がありましたが一方的な指導ということではなくて，私たち教師として

子供たちをどうとらえていくか，そういう観点から考えた場合に，わからせるというよりも，むしろ，わかってもらうためにはどうするのか，そういう原点に立って，私たちはもう一度子供の側に立って子供を見つめ直す必要があると思うのです．

むしろ，加害者としての教師の悪い側面というようなことを私たちはじっくりと見つめ直す必要があると思うのです．たとえばこのアンケートにもあるのですけれども，いつも教師の側に立った発想で子供たちの学習を論じてはいないだろうか，そういう反省を最近特にするのです．

いま私は，ある都立の定時制の高校の講師もしているのですが，ずいぶん年をとった生徒もおります．彼らの言い分は私たちに対する1つの告発だという気がします．中学校時代は，評価でみると1とか2というのが大部分だったと思うのですが，彼らの率直な意見としては，先生が悪いんじゃないかというわけです．英語がきらいになった条件を具体的に聞いた中で，たとえば自分が一生懸命やってきたのに，あいつはできないときめてしまって，自分の前まで来たのを自分を抜かしてちがう人を指してしまう．これは非常に頭にくるというのです．それから，わからないというと先生がおこってしまう．3番目として，先生だけが納得してしまってどんどん先に行ってしまう．中学校時代学習の面で認められなかった生徒たちが，たしかにわかればおもしろくなるのだということを異口同音にいっているわけです．

その話を聞いていて感じたことは，教師と生徒の人間関係をどう調整していくか．そういうことが特に定時制の生徒たちのことばの中に強く感じられたのです．

**下村**　まず英語を教えるということ以前の教師と生徒との人間関係とか，生徒不在であってはいかん，生徒の実態を正しくつかむことが前提になるとお話がありましたが，当然なことだと思うのです．そこで，その人間関係も申し分ない，ぴったりいっているといったときに，生徒を英語ぎらいにさせないような，もっとほかの具体的な方法があったらお話ししていただきたいのです．

**中田**　英語ぎらいにさせないというとこれは自信がないのですけれども，私の学校でも一番問題になるのは2年生です．2年生をどうやって乗り切るかというのはずいぶんむずかしい問題だと思うのです．お恥ずかしい話ですけれども，非行生徒がけっこういるのです．その生徒たちに，家で勉強するかと聞いてみると，やらないという．なぜやらないかというと，わからないからというのです．じゃあ放課後残って教えてやろうかというと，大体「お願いします」と来るのです．

菊地君子先生

やはり放課後なり，時間中なりの個別指導というのはどうしても必要だと思います．

**菊地**　個人差ということですが，標準をどこに置くかというのが悩みの種なんですけれども，授業の中にすごく簡単なこともあっていいし，むずかしいこともあっていいと思うのです．

それから全員必ず参加させるような，指名してあげないとかなり生徒はひがみますので多少むずかしくても，むずかしいことを当てると生徒は喜びますから，ちょっとむずかしいかなと思った程度でも当ててあげることが喜びになるみたいです．できた場合にね．

**中田**　それで，できなくてもおこらない．

**菊地**　ええ．ほめるタイミングでかなり変わってくるみたいです．

**下村**　先ほど大貫先生がおっしゃった，わからないと先生すぐおこるということと関係してくると思いますね．ただ，それと今度は一方では『英語展望』をごらんになってお気づきになったと思いますけれども，板橋区の先生などはかなりきびしさがあるわけですね．暗誦を徹底してやらせるとか，家庭学習なんかについても，宿題として英文を何回か書かせる，忘れた場合にはその分の10倍の残り勉強をさせるとか，それで私は鬼と呼ばれることになったというようなことをいっています．かなりきびしい指導をしたのだろうと思うのですが，結果的には，教師の熱意があれば，忍耐強くやれば意欲的にならないということはないというようなことを実践の結果として書いていらっしゃいますね．

**中田**　全くそのとおりだと思います．生徒はやはりきびしいものを期待していると思うのです．鍛えてもらえれば，口では鬼といっているかもしれないけれども，心の中では相当感謝していると思います．

**下村**　わかるようになりたいというのはどの生徒もそうだし，そのためには先生がよく指導するということが大切です．生徒に学習する機会をうんと持たしてあげるということは，当てることも十分しなければならないし，生徒にいわせる機会もたくさんつくる．そうすることによって，生徒は，かえって主体的に授業に取り組み

下村勇三郎先生

ます．こんなこと当てたら生徒がかわいそうだとか，あるいは当たるとビクビクしている生徒がいるからかわいそうだといって遠慮したりしたらなかなか力もつかないということがあって，かえってそれが長い間には英語がきらいになるということもあるのではないかという気がしますしね．やさしさ，あるいは寛容であるということと，きびしいということ，この両方うまく英語の指導の中には両立させる必要があるのではないかという気がするのです．

## 楽しい授業

**中田**　きびしさもあると同時に，やはり授業の中に遊びがないといけないと思うのです．ゆとりといってもいいですけれども，授業計画をきちっときめちゃってそのとおりやると息が抜けないから，やはり息抜きの場面というのは，大いに考えて授業に変化を持たせる必要があると思います．

私がやっていることは，いまのところはマザー・グースを覚えさせるということです．生徒たちは歌だとか，マザー・グースなんかはよく覚えてくれるのです．卒業してもほかのことは覚えてないけれども，あれだけはよく覚えたというのです．それで英語がいくらかあのときは楽しかったというふうにいってくれるわけです．

**大貫**　Written Test の評価をする場合に，具体的に素点で出す形をとりまして，そしてそのことだけだったらとにかくやってくればできるのだという実感を子供たちに与える．私たちが1時間の中でいくつかの領域を押さえながら英語の授業をやるわけですけれどもその1時間の授業の中のどっかの部分で意欲をもって取り組む．しかもどっかでこれだけやったことが具体的にできたという実感があれば落ちこぼれにならないでしょうし，英語ぎらいということにならないのではないか．そういう観点に立って見つめ直しているわけなんです．

**中田**　英語の好きな子に対してはどの程度，あまり得意じゃない子に対してはこのくらいできたらほめてやるとか，やはり個人の能力に応じた指導が必要だということだと思いますね．

**大貫**　各領域別にみた学習到達度というものを私たちのほうで踏まえて授業展開していかないと，私たちは精密に細分化して授業をみているつもりだけれども，具体的に子供とのかかわりの段階ではかなり粗っぽさがあるように感ずるのです．

**中田**　そうですね．結局先生の立場からだけの研究が進んだけれども，今度は英語ぎらいの実態とその対策というのは，生徒の実態もよく考えてからという反省材料としてはたいへん意義のあるものではないかと思います．

**菊地**　やはりどうしても絶対ここまでは全員にわからせようというレベルを持っていなければいけないのですね．ただ，できる子に対しては，ちょっと程度上げたことをしてあげたほうがいいと思います．

それから授業について私はあまり変化に富んだことはしていないのですけれども，たとえば比較級を教えたい場合に身近な先生を2人あげて，Mr. A is younger than Mr. B. とやって，じゃあ今度は young じゃなくて old 使ってみな，というと生徒は身近だからすぐできるのです．感心したのは not as～as というややこしいやつを比較級に変えさせることを身近なことでやってみたらすぐできたのです．そういうことがあってちょっと興味のあることを選んでそれを材料にしてやれば生徒というのはすぐ乗ってくるなということです．

**中田**　結局英語というのは，ことばですからね．実際に使える場合を利用して教えるということはどうしても必要ですね．

**菊地**　できれば自習の時間なんかで，英語で数字を言って，その数字を書き取らせるのです．そういうことをするとほとんど全員が乗ってくるのです．簡単なことをたまにはしてあげる．たとえば電話番号を英語で言って，「いま何ていった」というふうにやるわけです．これは1年だけではなくほとんど全学年にやります．ただ，時間がなくて授業ではできないのです．

## 英語指導の時間数と指導要領

**中田**　時間がないといってすましてしまったらますます英語ぎらいの生徒をふやすということになると思いますから，どうしてもくふうしなければいけないことだろうと思いますね．

**下村**　時間に追いまくられている，教科書を消化するだけということだったらそういうふうにならざるを得なくなってきちゃう．3時間ということになれば明らかにその時間数が減るわけですから，ますますもって苦しく

なるわけですね.

**中田**　授業時間数ということは相当重要だと思うのです.『児童心理』という雑誌の「わかる授業の創造」というところで授業内容が理解できるかどうかというのは6つの条件があるという. 1番目は, 学習内容自体の難易度. 2番目は, 学習者の知的能力. 3番目は, 学習者の学習に対する意欲. 4番目は, 学習指導の量. 5番目は, 学習にかける時間. この5つの要素がうまくいったときに授業がわかるということなんです. ここで問題になるのは, 指導要領に示されている時間数だと思うのです. 昔は3年間で12〜14時間の時間がとれた. ところが, これからは9時間に減ってしまう. 昔の指導要領の内容と今度の指導要領の内容と比べてみると多少減ってはいるが, 時間数の減り方に比例してはいない. 学習にかける時間というのは明らかに減っている. それに対して指導の内容はそんなに減っていない. ですからこれから新指導要領の移行措置が終わってから英語科の受難時代が来るのではないかというふうに憂慮しているわけです.

時間数が減ると, 英語の先生は少なくてすむわけです. 英語の先生が少なくなるということは仕事の量がふえるということで, 先生自身のゆとりもますますなくなっていくということですね. もう1つは, 1クラスの生徒はいま最高が45人. 今度は1人でもオーバーすれば新しいクラスが設けられるという規定になっているわけですけれども, これも大いに問題だと思うのです.

英語の授業というのは, いまの40名前後の生徒で指導するというのはたいへん困難なことなのではないかと思います. 何よりいい例は『英語展望』の中に書いてある, ELEC賞を授賞された山浦先生は, 41名の生徒を3年間通して教えられたという人間関係が成立しているわけです. だからおそらく山浦先生は, 生徒の1人ひとりの特質についてよくご存じだったと思うのです. ところが一般のわれわれ教員というのは, 40名のクラスを6〜7クラスも教えていたりするわけです. 1人ひとりの生徒のことについて知ることのできないような物理的条件, 困難な状況でこれからもますます進めていかなければいけないのではないかと思うのです. ですからこの辺のところはこれを機会としてみんなで考えてもらっていい方向にいくという運動もしなければいけないかなというふうに感じております.

**菊地**　高校入試もかなり障害になっていますね. 指導要領で教える内容は減ってはいますけれども, いま教えないはずのものがかなり出ていますよね. ああいう状態も改善できればいいのですけれども.

**大貫**　たしかに中田先生おっしゃった展望として私たちはそうならなければいけないと思います. 同時にいつまでもないものねだりはできませんので若しいことはありますが, 現実的な課題解決として新指導要領の中でもいわれているように, 基礎的な能力を確実に身につけさせるということを真剣に考え直す必要があると思うのです.

中田 実先生

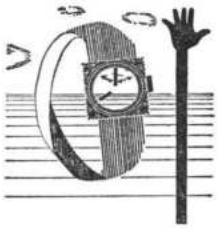
## 能力に応じた指導を

**中田**　受難時代なんていいましたけれどもそれにもかかわらず, がんばるぞということを言ったわけです. 中学校教育全体みるとむずかしいことになりますけれども, 根本的に指導の内容が減れば生徒はよくわかるようになるかというと, そうはならないと思うのです.

西ドイツで指導の内容を極端に減らしたところが, 非行少年がふえて困ったというデータが出ております. 日本もまたそういうあやまちをいまおかしつつあるのではないかなというふうに考えています. 子供を遊ばせるといったら語弊がありますけれども, 基本的な事項を教えうとしてゆとりを持たせてもうまくいかないのではないかと思います. ですからそういう時点に早く気がついて, いい方向にもっていかなければいけないと思うのです.

**下村**　英語ぎらいをなくすという問題は昔からいろいろ話題になってきました. それこそ地域的にも, あるいは生徒の個人差にもよるのだと思います. 低いほうの生徒, 中ぐらいの生徒, 上のほうの生徒といろいろありますけれども, それぞれに応じた到達目標を押さえて指導しなければいかん. そういうことを心がけて指導して, 多少なりとも落ちこぼれとか, あるいはきらいな生徒が救えるのではないかということは私も皆さんのおっしゃることに同感です. それから忘れてはいけないのは, 上位の生徒に対しても配慮する必要があるのではないかということです. たとえば, できるだけ教科書以外の英語に取り組むチャンスを与えること. 教科書から離れた英語を聞いたり, 話したり, 読んだりする, その喜びもぜひ植えつける必要があるのではないか. 教科書だけやっ

(p. 11へつづく)



# 誰でもできる家庭学習

大金津義

私は昨年4月に当校に転任し，2年生6学級と1年生2学級の英語を担当することになった．新任校での第1時間目，そろそろ始まっていた2年生の英語嫌いを，私は決定的なものにしてしまった．教科書の本文が見えないほど真黒に埋められた仮名と日本文の鉛筆書きを，有無を言わせず消させてしまったのである．この時から彼らが歩行困難になろうとは気付かず，複雑骨折の患者にギプスも当てずに，歩け歩けと歩行訓練を強行したのだから彼らの拒否反応は凄まじかった．1年間宥めすかし，威嚇し，わめき騒いで過したが，その結果は惨めなものであった．

学年末テストが終った頃2年生から質問を受けた．She has breakfast. は has があるのになぜ現在完了の文ではないのか，どこでどのようにして見わけるのかというのである．彼は breakfast が目に入った時，毎朝時計と睨めっこで掻っ込んで来る朝食を頭に浮かべるのではなく，先ずブレックファストと仮名を思い浮かべ，それから教科書の後の単語表で意味を調べる．そして She has breakfast. は「彼女が持っているのは朝食だ」という日本文を創作し，has の後に何やら1語あるから，先日勉強した現在完了の文だと決めつける．とにかく，この質問は私の失敗を告発する言葉であることに間違いはない．

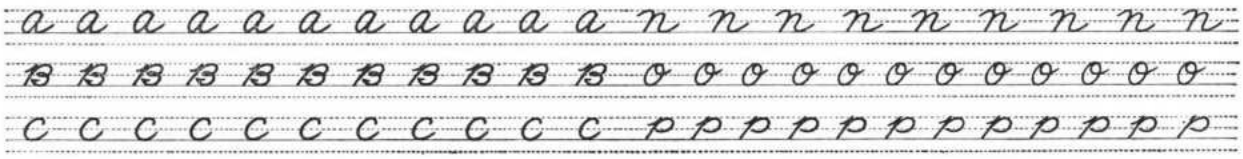
さて，1年生で同じ失敗を繰り返してはならない．私は①教室では hearing, speaking, reading を徹底的にやり，②絵や実物を見せ，動作をさせて，英語そのものを身につけさせることに努力した．③一方，家庭学習の習慣のない地域性を考慮し，毎日15分，20分でいいから復習の時間を確保し，writing をそれに当てることにした．家庭学習は，誰の助けも借りず自分の力だけで正確にやることができ，しかも定着するまで執拗に繰り返しを重ねる仕組みにした．そのためプリント作りに多くのエネルギーを注ぎ，1年間に生徒に渡したプリントは250枚余になった．

最初のうちは英語の授業のある日だけに渡していたが，書くことに興味を持った生徒の方から毎日やりたいとの声が起き，私は毎日追いかけられる思いでプリント作りをすることになった．写生会の前日プリント配布を忘れ，当日会場まで届けに行った時は，さしもの生徒も驚いたが，そうしたことが生徒の学習意欲をゆさぶる結果となった．生徒は，体育大会の日も，遠足の日も，全員が毎朝この家庭学習のプリントを検閲してもらうため提出した．私も1日1時間しかない空き時間に全部のプリントに目を通し，正確であることを確認し，間違いがある時はその個所に印をつけて返す仕事を繰り返した．夏休み，冬休みも市販の問題集など購入せず，1日1枚宛のプリントを用意し，休み明けに提出させて，全部に目を通したことは勿論である．

プリントの内容は決して整ったものではなく，その時その時の必要に応じて作ったものである．1年間を振り返ってみる時，このプリントによる家庭学習をやらせたことが，落ちこぼれを最少限に防ぐことに役立ったのではないかと思う．どのようなプリントを作り，どのようにやらせたかを具体的に述べてみたい．

**（図1）**

次の字の上をていねいになぞりなさい。1文字1文字声を出して練習しなさい。



### 1. 空中書きとなぞり書き

入門期の writing は先ず alphabet から始める．script 体は小学校で書いているので敢えて触れず，26文字を順序よく正しく発音できるようになったらすぐに筆記体の指導に入る．横長にしたざら紙を中央で2分して4線紙を作り，Aから順に各行に同じ文字を書けるだけ書いたプリントを作る．(図1)　私が黒板に大きく書くのに合せて生徒は手をあげて空中に何度も何度も練習する．十分に練習ができた頃を見計らって，印刷された文字の上を鉛筆でなぞり書きする．鉛筆はBを用いた方が書き良いし，はっきりする．教室での作業はここまでとし，家庭学習として赤鉛筆で再びなぞり書きをしてくる．このようにして大小文字の指導を終る．

全く同じ手順で単語や文を書く練習をする．慣れるに従い，なぞり書きの回数を減らし，最後には自力で書くようにする．なぞり書きをさせることにより，ve が ue になったり，br が hr になったりなどの混乱は全く見られず，正しく美しい文字が書けるようになった．また文を書く時も大小文字や句読点の注意をする必要がないまでに習慣化された．

### 2. 赤鉛筆の活用

授業が進むに従って学習事項は複雑化し，その節々で英語嫌いや落ちこぼれが生まれる．これを救う手段として学習の急所を必ず赤鉛筆で確認させた．当然のことながら，常に既習事項から始まって次の step に進むわけだから，既習事項と新出事項と異なる点はどこかを印象づけ，そしてそこが正しくできたかを確認させるためである．例えば進行形の指導に当っては，既習の I play the piano. をもとに I'm playing the piano. を導入し，プリントの例文の 'm と ing の下に ～～～印をつけて「赤鉛筆で確認せよ」と注意を呼びかける．(図2) そうすることによって「進行形は ing」と思い込んで Be 動詞をぬかしてしまうような誤りを犯さなくなる．

### 3. 資料の整理と反復練習

本校の生徒のように英語と無縁の日常生活を送る生徒はもちろんのこと，中学の段階では教師が反復練習の機会をより多く作ってやらなければならない．生徒に勉強させるだけでなく私自身も常に先を見越して資料を整理し，時には未習語を前寄せて導入し，十分定着した時に新文型の中で活用した．例えば，進行形の導入に当って sit と sitting を同時に教えることは絶体に避けたいので，sit by the door の形で習熟した後に，sitting by the door と対面させるといった具合である．その積りになれば，有り余る資料が集まり，反復練習の材料に事欠かないで済む．

### 4. 評価

家庭学習の成果を評価する最も手取り早い手段として毎時間小テストをやった．毎回2，3日分をまとめてやらなければ週3時間の授業では消化しきれない．単語は10問，文は5問を決められたテスト帳に書いて提出する．私は生徒が群り見守る中で採点する．万一間違えた時は間違いを消さずにその上段に赤鉛筆で訂正させる．どこを何故に間違えたか反省し，同じ失敗を繰り返させないためである．最初満点は少なかったが，慣れるに従い40名中35, 6名が常に満点をとり，生徒は互いに連勝記録を誇りあった．

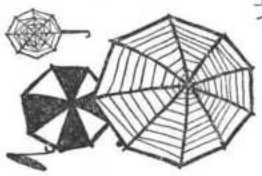
5分かそこらで40人のテストを採点することは大変な仕事のように思えるが，全員が同じ型のノートの同じ位置にきれいな文字で書いてあるし，殆んどが満点なので決して大変な仕事ではない．欠席してテストを受けなかった生徒は，いつでも私を捕えてテストを受けることにしてある．ノートを用いたのは成績を学期末に1度にまとめて記録するのに便利だし，自分の学習の歩みとして生涯の記念にしてもらいたいと考えたからである．

年間授業時数遂に83時間の学級もあったが，予定の年

(p. 46へつづく)

(図2)

# 英語学習における創造性の育成



海　野　英　雄

夢多い多感な青春時代を生きている生徒たちは，誰でもより高いもの，より強いもの，より美しいものを求めている．にもかかわらず，いろいろな要因が彼らの願いを押し隠してしまっている．そこでこれらの要因を追求し，除くべきは除き，新たに与えるべきは与えることを考えねばならぬ．

生徒たちが学科をしっかりと行なわないわけを追求してみると，結局，学習を楽しいと思っていないことにあると考えられる．もし，学習がおもしろくてたまらなくなったら，彼らは誰の目も届かぬところでも，勉強するはずである．だからその解決のための根本問題は，どうやって学習をおもしろくてたまらないと感じさせるかにあるわけである．では，それはいったい何であろうか．それは学習することによって，ひとりひとりの生徒が「わかりだした」「できだした」と学習の喜びを感ずることである．それは，成功，進歩，向上，発展，自我拡充の喜びに他ならない．こうした充実感，満足感を味わせない教育は，けっして本質をつくものでない．

そこでまず考えられねばならないことは，生徒はすべて生得的資質を背景として，さまざまな学習経験を持ち，それぞれに異なった力を持っているわけであるから，これを冷静に直視し，生徒の個性，能力，傾向，興味，関心に即応した学習への道を開いてやらねばならない，ということである．これは，教科書という画一教材による学習から出発した場合の多様化のみならず，本稿では言及しないが，読書材の個別化，複数化という両面からなされて，はじめて可能なことと言えよう．

つぎに，自我拡充の願いが真に満たされるためには，やはり生徒自身の個が確立し，相当学習に熟してこなくてはならない．自分で勉強せず，教師の指導によって納得するというのでは，その喜びもきわめて浅いものである．学習の喜びは，自分が学習に熟することの深さに従って高くなってくるものである．学習材料に取り組んでみて，わかったところ，わからないところ（疑問点，困難点，問題点）に直面し，悩み，苦しんだときほど，後で，「なるほどそうか」という，納得と成功の喜びを深く感ずるものである．

さらに，生徒たちが学習に喜びを感ずる本質的なことは，各自の学習したことが，学習に取り上げられ，検討され，修正され，承認され，授業に面目を発揮するという，集団所属の欲求，友人，小集団，学級集団に有効にかかわり認められる，という承認の欲求の満足である．それは，学習効果に大きく影響するだけでなく，学級の望ましい人間関係に多大な寄与をなすものである．

そこで考えなければならないのは，創造的な活動を通しての創造性の育成である．それは，一般的に，個人の新しい創造的な考えや型，もの，ことを作り出すこと，あるいは，新しいもの，既習のもの，過去の見聞のものを，新しくくふうし改良して生み出す学習と言えようが，広く考えれば，外国語という未知の語を学ぶこと自体が，創造性の陶冶につながるとも考えられる．言語と思考は密接に結びついている．生徒の思考，感情が豊かになるにつれて語いも豊かになり，言葉が豊かになるにつれて，思考，感情も豊かになってくる．つまり，表現する，という言表行為そのものが創造性の表われである，と言えよう．

もし生徒が，自分の考えや，自分の行動を口で表現できたり，書き表わすことができたとしたら，それが身近なことであり，あるいは稚拙な表現であったとしても，その感激や喜びがどれほど大きなものであるか，はかり知れないものがあろう．生徒は，このように，自らの発意によって何かをやりとげたとき，なしとげた，克服したこと自身に，大きなよろこびと充実感を持つものであるが，言表は，それが正しければ，かならず，聞き手，読み手に理解され，共感，共鳴を呼ぶものである．これこそ，生徒にとって最大の報償であると言えよう．

ところで，表現を中心とする学習を内面からとりあげた場合，伝達本位の活動と表現本位の活動とが考えられよう，伝達本位の活動はどちらかと言えば，社会性の獲得をめざすものであり，表現本位の活動は，内面の充実を促すものである．従来は dialogic な対話的側面のみが重視され，協力対話学習，というような試みのみが強

調されるきらいがあったが，やはり monologic な独白的側面をとり入れることの重要性を考えねばならない．

そこで，これらの諸点を踏まえて，単元の発展的学習としての独白的自己表現学習を考えてみた．指導手順は，単元学習の済んだところで，関連，発展としての題材を話しあって決め，構想をねり下書きをする．次の時間にグループ批正，推敲をしてみる．この時，語法や表現について質問を受け，必要に応じて表現について指導助言してやる．これを家に持ち帰って清書し，スピーチ練習にはいる，グループ単位で発表会をして，内容についての質問，答え方などを共同で研究する．これを母体として全体発表をし，発表された内容について話しあってみる，というやり方である．

例えば，*New Horizon English Course* の 2年生 Lesson 1 "Mike and Kathy" が済んだところで，自分のこと，家族のことなど，やや系統的に表現してみよう，ということで始められた学習は，S．A．生の紹介の場合，次のように展開した．

My name is S. A. I was born on May 5, 1963. Father, Mother and my brother live in Tokyo. I live with my grandmother. Father works in a transportation company. I like and respect Father. My hobbies are sleeping, eating, listening to the radio and teasing. I like to play tennis. I don't like homemaking. I like young, kind, handsome and strong boys. But there are no such boys in my school.

Q: What music do you like?
A: I like classic (classical) music.
Q: Why do you live with your grandmother?
A: I don't like... (to tell about it).
Q: What lessons do you like?
A: I like this lesson.
Q: What food do you like?
A: I like Chinese noodle.
Q: Whose teasing? (Whom do you tease?)
A: Hisako and Sayuri.
Q: What radio programs do you like?
A: I like "All Night Japan."

.....

こんな活動に対して，K. T. 生は，次のような感想を漏らしている．

「みんな楽しくできたし，とちゅうで単語や文型などわかってよかった．教科書の学習よりもずっと楽しかもった．今度やるときは全部の人が質問したり，話しあえるようになれば，なおよい学習になるだろう．今度の自己紹介は比較的単純だったが，この次は，ぼくらがいつも日本語をしゃべっているような感じの自己紹介をやってみたい．また，ぼくらが誰かに手紙で語りかけるような文章を，1回でいいから作って，発表し，話しあってみたい．」

紙面の都合で，一例にとどめるが，生徒達の希望を聞いて，身近なことを発表題材にし話しあってみるとか，物語や伝記を読んで読書感想文にまとめ，これをもとに合評会をやってみるとか，教科書の中の生徒の興味ある題材で，対話文を作り，劇化してみるとか，活発な言語活動の態度の育成のために特別な時間を設け，英語を楽しく使う場面を設けることは，やり方によって，かなりできるのではなかろうか．

いずれにしろ，英語を外から投げかけているだけでは，生徒を真の意味で英語好きにさせることはできないのであり，入門期の生徒の未知の外国語への憧憬と夢とを，無惨に打ち砕いてしまったら，取り返しのつかないことになる．

生徒の琴線，生命線に触れ，対決を迫り，使用を通しての習得の喜びを味わせることを通してのみ，道は開かれるのではなかろうか．

進度ばかり気にせず，時には時間をかけてやってみることを勧めたい．その中にきっと生き生きと甦り，蘇生する幾人かの姿を発見できよう．

本稿を書くにあたって，『英語科における言語活動の理論と実践』掘口俊一編，桐原書店，他数々の文献を参考，引用させていただきました．謝意を表しつつ…．

（信州大学教育学部付属松本中学校教諭）

8月中旬刊行

女性文化の創造へ

渥美育子著　予価1,200円

今までの長い歴史のなかで，女性という存在が今ほど注目をあび，真剣に研究され，社会的な力をもって動きはじめたことはなかったであろう．それは全世界的な現象であり，あらゆる分野に浸透し始めている．その中でももっとも顕著な動きを見せるアメリカという国に永年身を置いた著者が，独自の，詩人としての鋭い感受性と卓越した表現力をもって綴る衝撃のエッセイ集．

ELEC出版部

# 「英語ギライ」と学習意欲を高める指導

石 川 喜 教

中学生になって英語を学ぶということは，子供たちにとっては大へん興味と関心があり，それだけに彼らの期待も大きい．しかし入学時の期待とは裏腹に，純粋な彼らの学習意欲は，学年が進むにつれて変化し，遂には「英語ギライ」という状態になってしまう生徒が出てくるということはなぜなのだろうか．

## アンケート*に見る共通点

アンケートによれば，各学校の地域差，教育環境によって多少結果が異なるが，共通してることがいくつかある．その中で「英語の授業が楽しいと思う」生徒の数が，学年が進むにつれて漸減し，逆に「特に楽しいと感じることはない」という数が増えている点に注目したい．このことは筆者自身も日常体験していることであり，全国的に見ても生徒の英語の授業に対する見方は大体このようなものかも知れない．特に楽しいと感じない生徒の中には，何かのはずみで「英語ギライ」になってしまう者もいるかも知れない．従って教師は，そうならないように歯止めを掛けるような指導をしなければならないのだと思う．

## 「英語ギライ」にさせるものは何か

「英語ギライ」になる原因として，第二砂町中学校の福井先生もいくつかあげておられるが，直接的には教授内容と教授方法が関係してくると思われる．しかし一口に「英語ギライ」といっても，その原因となるものは，生徒一人一人によって異なると思われるので，解明はむずかしい．しかし，英語という教科のもつ教科内容的な要因として考えられるものをいくつかあげることはできる．

一般に「英語ギライ」の始まる時期として，入門期の口頭練習が終り，教科書中心に指導が移行して行く1年の1学期後半か，2学期頃から脱落者が出てくると言われている．そして「わからない」ことが積み重なって行くうちに自信を失う．そして学年が進むに従って，1時間の導入項目が8～10にも達することがあり，増々腹下しの状態となる．おまけに，英語学習は最初から完璧主義ときているから，ちょっとした間違いも許されないようになっている．従って成就感を持ち得なくなり，遂には「英語ギライ」の道をたどる．また英語学習では，4技能を調和的にのばすことが良いとされるが，これも言うは易く行なうは難しである．

次に何故英語をやるかという目的意識が不明確である．「生きた言葉」としての，英語学習本来のあり方とは無関係に，現実は高校入試（大学入試）のために，止むを得ず英語をやるのだというのが実際の姿である．英語は本来音声言語であると力んではみても，入試には，(少なくとも現在までは)大部分が音声面のテストは軽視されて来ており，生徒も教師もそれに合わせた勉強が中心となっている．従って1時間内で教える項目も多く，勢い授業の方法も，訳読中心，暗号解読となり，生徒にとっては苛酷な学習作業が課せられ，英語学習の楽しさは増々なくなって行く．

しかし，こうすることが最も手っ取り早い現実の対応策であり，教師自らが「英語ギライ」を作っていると知りつつも，止むを得ず行なっているというのが現実であろう．今仮りに，音声に重きを置いた授業と，そうでない授業を併行して行なった場合，生徒はどのように反応を示すだろうか．恐らく当然のことながら，直接受験に結びつく方に生徒の力点が置かれ，片方は軽視され勝ちとなるであろう．このように考えてくると，「英語ギライ」は，好むと好まざるにかかわらず作られる仕組みになっているといえそうだ．

以上英語という教科のもつ特殊性，及び教育の制度上からくる問題点などを考えてみたが，他の要因としてはどんなものがあるだろうか．筆者の観察によると，学力不振の生徒の中には，先生のモデルに従って英語をまねることが良く出来ない者がいる．つまり英語が音として記憶できないわけである．物事を学びとることの第一歩は，「まねる」ことにより「学びとる力」が出来るようになるという．従って，このような生徒は，小学校時代

*「英語ぎらいの実態とその対策」本誌 No.61, pp. 4—11.

に基礎的な訓練が完全に身についていなかったのではないかと思う．問題を解くという技術的なことは知っているのだが，自らの力では勉強をして行くことは到底出来ないようだ．

「まねる」という基本的なことからもわかるように，英語の学習では良いモデルが必要である．そのためには，教師は実力もあり，人間的にも魅力的でなくてはならない．中学生にとって，自分が習っている先生が好きか嫌いかということは，成績にも影響を与える．しかし誰しもそのような魅力溢れる教師になりたいと思うが，現実は時間的余裕もなく，そうありたいと思っても出来ない状況である．

最近とりわけスポットの当っている「落ちこぼれ」の問題がある．これは，戦後経済成長が著しく発展し，それにともない教育に対する関心が高まり，多くの子供が進学を希望するようになった結果，社会や親の期待が大きくなったが，子供の能力はそれに比例して伸びず，ここに親の期待するものと現実との間にズレが生じて出来た結果だと言う．

こうした社会的背景を考えてくると，「英語ギライ」を解消することは，至難のことであるということになる．しかし，少しでも「英語ギライ」を少なくすることがこの問題のポイントではないかと思う．

## その対策

以上「英語ギライ」を作るさまざまな要因をあげたが，我々が日常の教育活動の中で出来ることから，一つ一つその対策を立てて行くことが必要である．

**（1）教材の量と内容，そして教授法の検討**

生徒の興味が湧く，また生徒の体験と結びつくような題材を提供したい．しかし興味のある題材でも，生徒が1時間内で消化できる分量は限度があり，生徒の実状に合わせて，教材量を規制しなければならない．教授法も効率の良い教え方を採用し，一斉授業についてこれない生徒には，それぞれ個別に指導方法を工夫して指導する．つまり授業に音声を重視した教え方を取り入れて，スピーディで変化のあるものにすることである．

**（2）テストの方法の改善研究**

これはなかなかむずかしい問題である．とかく教師は自らが考えている評価の尺度に合わなければ全部だめ，というようにきめつけてしまいがちである．しかし英語の成績がペーパーテストでふるわない者の中には，hearing test には良い成績を出すという生徒もいることは事実であり，そういう生徒個人の得手を踏まえた上で評価する方法を，研究しなければならないと思う．

**（3）採点方法を工夫する**

英語の採点に当たって，とかく all or nothing で行なうことが多い．生徒の立場から見れば，せっかく努力したのに，という空しさに似たものが残ると思う．指導の過程では，臨機応変の処置を講じることも必要である．

**（4）到達目標を欲ばらない**

週3—4時間程度の授業時数では，多くを望めないことは明らかである．そこで少なくとも基礎的なことは，一応理解できており，ゆっくりでもいいから，読んでわかる力はつけて置きたい．そして更に自分の力を伸ばしたい者は，伸ばせるような下地は作って置いてやりたいと思う．

**（5）愛情のある授業**

教師である以上誰しも，常に教育に情熱を燃やし続けたいと思うし，また生徒と一体となる充実した授業をしたいと思う．そして皆が喜こびに参加出来るような授業でありたいと思う．しかしながらむずかしい．『英語展望』No. 61に，ELEC 賞に輝く山浦昭雄先生の実践報告が載っている．僻地校での英語の授業は大変な苦労であったようだ．筆者はかつてこの地を訪れ．つぶさに先生の授業を参観したことがあるが，生徒が生き生きとして，先生の指導について行っており，教室の正面の上方の壁には，「英語日本一になろう」と書かれてあったことが印象に深い．山浦先生の教育の成果は，先生自身の教育に対する熱情もさることながら，それを支えた村長をはじめ PTA，学校職員の方々の陰ながらの援助を見逃すわけにはいかなかった．そしてこの僻地に，失われた教育の本来の姿があるように感じられた．

最後に，特に目新しいものではないが，筆者が行なっている対策のいくつかを列記する．

・授業は音声を重視し，毎時間ほぼ同一形態で行なっている．(Oral Approachの考え方である)

・生徒各人の目標を持たせる意味も含めて，毎時間の written test の成績は（採点はA，B，C，D，Eの5段階）記録用紙（印刷されている）に記録し保存する．1学期中に2回教師に提出し，評価の資料とする．英語の成績は生徒各自が出すという建て前である．

・授業中に成績不振者にも成就感を持たせるように，指名に工夫をする．

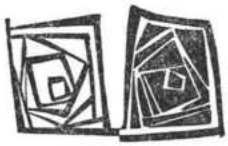
・英検3級の受験．

・暗誦大会，学級毎に全員が参加，選ばれた代表者で競う．判定は他教科の教師にも応援してもらう．

・副読本の利用．長期休暇の時などに，外国の出版社から出しているものの中から，興味の湧きそうなものを生

(p. 43へつづく)

# 学習意欲を持続させるために



鈴　木　　敦

学習意欲を向上させるための方法として，東京・一橋中学校の石津谷先生が述べておられる所（本誌 No. 61, p. 5）に 100% 同感です．私はここで，私なりに実践してきたことを少しく具体的に記し，更に，今1年生の授業を担当している立場から，やや観点をかえて，真に英語を好きにさせるための一つの仮説を申し述べてみたい．

生徒の学習意欲を支えるものとして，私は次の3点を特に重視して，日常の授業に臨んできました．

①「わかる授業」をすること．そのために，1時間の授業のなかに1つか2つ，考えさせる場面を設定し，挙手によって理解を確かめながら，ほぼ全員がわかるまで，既習事項のフィード・バックを重ねていくのである．「わかった」という実感をもたせるためであるが，生徒の知的な欲求に応じつつ，進んだ生徒の定着にも役立つものである．

②「学び方」を明確にすること．これは，生徒が学習に見通しをもって積極的に参加させるためであるが，「自己評価カード」をもたせておき，音読回数や復習小テストの得点，読解についての True or False テストの得点などを自分で記入させるものである．これは又，学習の過程・方法を示すと同時に，「自分は努力している．がんばっている」といった自負をもたせるのにも有益である．

③ 楽しい雰囲気づくり．これは，生徒を甘やかすといったことではなく，face to face などのしっかりした学習規律の上に立って，常に humourを心がけることである．私は，英語の特徴の一つは，humour にあると考える．つまり，ある現象・できごとについて，主語をかえて述べることが humour につながるように思えるのである．

以上が私の classwork phylosophy(?) であるが，今考えるに，これは，すでに学力や意欲にかなりの差が見られる生徒たちの授業を引き受け，それとの取り組みの中からつくりあげてきたものである．従って，ここでいう学習意欲とは，英語そのものが好きであることのほかに，いわば“人間的”ともいえる要素が多分に入りこんでいると言わざるを得ない．生徒の自由表現の中にあった次の文は，あながち矛盾・自己撞着とは言い切れないのである．

“I like our English teacher, but I don't like English.”

いわゆる入門期の指導にあたっている今，彼らの今後の英語学習を展望しつつ，真に英語を好きにさせるために，次の2点に力を注ぎたいと考えている．

①英文の構造をとらえるために，特に，後置修飾構造の学習を重視する．これは，速読速解にも，listening comprehension のためにも欠かすことができない要因であり，集中的な hearing practice と表現練習をカリキュラムの中にしっかりと位置づけている所である．

②英語の音組織．日英語の相違をきちんと身につけさせる．その中で特に重要なのは，無声音・黙音と reduced form ではないかと考える．2, 3年生になってから，「英語は速すぎる」「はっきり聞こえない」といったいらだちを感じ，それが原因で英語を縁遠いものと思ってしまったならば，それでおしまいではなかろうか．入門期から段階を追って音声指導を続けてゆき，生徒の発音に strict になるということではなく，英語に対する一種のあこがれをもたせ続けることが大切であると考える．

英語を身につけていくこの過程には，必ずや，聞いてわかる喜び，言える喜びが随伴し，communicate できる喜びと結びつくに違いない．そして，これこそ英語の学習意欲を支え，持続させる真の要因であろう．

このために私は，音声指導のカリキュラム（pronunciation practice, listening practice も含めて）をつくっていくつもりである．ご指導ご教示をいただき，情報を交換しあっていきたいと，強く念願する次第である．

（千葉県安房郡千倉中学校教諭）

〔訂正〕前号5頁の「身近な目標の設定」の筆者福井久子先生とあるのは福井友子先生の誤りでした．お詫びして訂正いたします．

# バラッドの世界 (その12)

## ——方法についての弁明，その他——

平　野　敬　一

バラッドとのつきあいについて，気ままに書き進めているうちに，いつのまにか回を重ねて12回になってしまった．結論らしいものは，いっこうにみえてこないし，バラッドについてなにか解明できたかというと，それもはなはだおぼつかない．ただ，この連載でバラッドに対して筆者がとってきた接近法について，このあたりで若干の説明（言い訳？）をするとともに，できることなら再点検もしてみたいと思う．

まず最初に諒解してもらわなければならないのは，この連載で私がとった手順や方法があまり「学問的」でないということである．いままでに公表公刊されたもろもろの研究を広く渉猟し，諸家の説をつぶさに公正に比較較量して，もっとも妥当と思われる解釈を提示する，というのを学問的方法というのなら，私の方法がそれにあたらないことはいうまでもない．諸家の説を，ことさら避けて通ってきたつもりはなかったが，私はバラッドについての諸家の説を土台にし出発点にして，そこから個別のバラッドの検討あるいは考察に入る，という手堅い手順を踏んだ方法をとらなかった，というよりとりえなかった．私は，なによりも個々のバラッドとの出会い，その出会いから来る感銘，を出発点としたかった．その出会いの感銘と直接つながらないような諸家の説は，それがどんな高論卓説であっても，私にとっては，さしあたりあまり関係のない，要するに，どうでもいいことだった．チャイルド教授がそのバラッドの大集成に付した解説は，当時としては驚くほど広く古今東西の文献を渉猟したものであり，研究者にとって今なお欠かせないものであるが，それとて私は必ずしも重視しなかった．チャイルドが集成したバラッドの諸々の versions や巻末の語彙辞典をたえず参照し，利用しながらも，その詳細な解説の方は，とかく無視することが多かった．チャイルド教授の解説すらしかり．他の諸家の説となると，私の応対は，もっとそっけなくなることが多かった．

なにかのきっかけで出合い，親しむようになった特定のバラッドを，そのさまざまの別形，変形を含めて，何年にもわた繰り返し聴いているうちに，おのずと自分の中に，そのバラッドの姿，イメージが出来上がり，定着するものであるが，そういうバラッド体験とでもいうべきものをもとに，そのバラッドの素性や魅力の解明に向かうのであるが，その解明の途次で私はいろいろの文献に当たることがあった．そういう多くは偶然的な，かなり恣意的なものが，私にとっての「参照文献」だった．偶然出合ったというだけの文献を資料にすることも少なくなかった．

研究者としては怠慢のそしりを免れえないが，定評ある国内外のバラッド研究書を取り揃え，それらを丹念に参看するという労をすら私はとっていないのである．少なくともここ何年来，バラッド関係の音声資料（主としてレコード）の収集にかけた時間と労力の半分も，私は活字資料の渉猟にかけていないのである．もちろん，これは自慢できることでなく，私はただ自分の方法の偏りを告白しているだけである．過去の研究の無視や見落としは，そういう偏った私の接近法から来るものであって，私が意図的に先学の研究業績を否定しているわけではない．バラッド専門家は，あるいは私のバラッド考察の中に国外の碩学(せきがく)．たとえば F. B. Gummere. W. P. Ker, G. H. Gerould などの，あるいは国内の先学，たとえば渡辺精や原一郎などの業績が利用されていないことをいぶかるかもしれないが，それはただ，私が特定のバラッドの解明を試みている途次で，これらの先学に出会う機会がなかった，というだけのことである．既往の研究書を参看していない場合，中には食わず嫌いといえる場合もないわけでないが，まあ，いままでのところ，なんとなく縁がなかったというケースの方が多かったように思う（系統的な研究や読書に立脚していないという点で私のマザー・グース関係の論考も同じ批判を受けなければならないであろう）．

またバラッド学での古典的争点の一つとなっているバラッド起源（発生）論への言及のないことを指摘する人もいるかもしれない．バラッドの起源について私は新し

い照明を与えうる自信はなかったし，またどういうわけか，この問題にあまり切実な関心をもてなかったのである．バラッド学の争点であっても，私にとってissueとならなかったものには，当然ながら触れていないのである．そのうち，なにかのきっかけでこの問題につきあたることがあるかもしれない．それまで待てないことはなかろう．

ただ一つここでいえることは，私は，バラッドがどういうふうに口誦(口承)，され，どういうふうに人の耳に響いていたかという音声面を軽視あるいは無視したようなバラッド論議にはどうもついていく気がしないということである．半世紀以上も前の岡倉由三郎の研究（*Old English Ballads.* 研究社，1923）が音声面を無視しているのは，当時のバラッド研究の資料状況からみて止むをえなかったことと思うが，その後，陸続と出た音声面からの研究（たとえばB. H. ブロンソンのすぐれた業績）や音声資料（たとえばSound Archives of BBCやAmerican Library of Congressが提供するもの）を無視して，いまなおバラッドの「文学研究」だけに没入して活字資料から一歩も出ないようなアプローチに私はどうもついていけないのである．また，実際，そういう手の論考は，読んでもほとんど得るところが（少なくとも私にとっては）ないものである．といって，なにも古い研究書がすべて時代遅れだというわけでは，もちろんない．たとえば50年前に出たL. C. ウィンバリーの*Folklore in the English and Scottish Ballads* (1928; rpt., 1965)は，方法論的にも内容的にも日本で出ているいちばん新しい研究書よりはるかに新しいように私には思われる．古いとか新しいというのは，時代とは，あまり関係がないらしい．

## A. B. フリードマンの名解説

私は音声資料（レコード）を繰り返し聴き込み，その音からくる印象をもとにして，あれこれ連想の糸をたぐるという方法を好む．伝承童謡を調べる場合も，基本的に方法は変らない．いきおい，私は既刊の，多くは一時代前の研究書の忠実な読者になかなかなりにくい．しかし，前述したように，私は故意に先人の業績を避けているわけではない．きっかけさえあれば，読む範囲を広げ，私なりに得心したり，目を開いたりしているのである．

フリードマン（Albert B. Friedman, 元ハーヴァード大教授）が編纂・解説した．*The Viking Book of Folk Ballads of the English-Speaking World* (1956)は，どういうわけかアメリカのViking Pressから出ている間は，いつ注文してもout of printで，私の手に入らず．被見する機会をえなかったものだが，最近，版元をイギリスのペンギン・ブックスに移し*The Penguin Book of Folk Ballads of the English-Speaking World* (1977)として出るようになり，ようやく手に入れることができた．フリードマンによる解説的序文（ix—xxxv）も，そういうわけで今回はじめて目にすることとなった．

フリードマンの解説は，Introduction; Ballad Style; Ballad Subjects; Ballad Meter, Refrain, Music; Varieties of Ballads; Ballad Origins and Transmissionの各見出しの下に，バラッドの全容を簡潔に手際よくまとめたものである．少ない紙数（27ページ）でバラッドについての基本的常識といったものが過不足なく網羅されていて，この種のものとしてはリーチが自分の編纂になる*The Ballad Book*(1955)に付した解説（Preface, 44 pp.)と肩を並べる出来栄えであるように思われる．

バラッド選集の解説とか序文というものは，私といえども，いちおう読んでみることにはしているが，必ずしも感銘を受けるとは限らない．しばらく経つとなにが書いてあったのか，いっこうに思い出せないほど印象のうすいものも少なくない．いま，その内容がはっきり私の記憶に残っているバラッド集の解説といえばホジァート(Matthew Hodgart)が*The Faber Book of Ballads* (1965)に付したものくらいだろうか．ホジァートの"the Great Tradition"と"the little traditions"という分類（前者はチョーサー以降の正統的英文学の系譜，後者は民間伝承の系譜やバラッドなど，つまり私流にいえば「文学」と「伝承文化」の分類）は，教室などでバラッドを解説するさいに便利なので，大いに利用させてもらっているが，その他の編者たちの解説で役立ったものは，あまり記憶にない．

私はフリードマンの解説の全般的な手際のよさにもちろん感心したが，それよりところどころにキラッと光る氏のバラッドの本質に対する鋭い省察にいっそう感心した．感心した，というより驚かされた，といったほうがあたるかもしれない．

というのは（私事で恐縮だが），私は，ここ何年来，文学のことしか念頭にないらしい日本の英文学関係者（学生を含む）に対して「非文学」の効用を説いてきた（つもりである）．つい，二，三週間前にも，私はある出版社の英語教育の企画のために「非文学英語のすすめ」という一文を寄稿したばかりである．その他にも私は短い雑文で「非文学」の勉強をすすめたことが，いままで何度かある．「非文学」というのは熟さない表現であるが，私はそれを少なくとも十年来，我流に使い，英

語の遊び唄も民謡もバラッドも，その中に含めてきた．ところが，である．フリードマンのバラッド集の序文を読むと，なんと「バラッドは歌われ，あるいは演じられるものであって詩歌ではない．バラッドは文学ではなく，非文学である（not literature but illiterature）」とあるではないか．この“illiterature”という語は，16世紀末から記録されていてフリードマンの造語とはいえないが，*O.E.D.* では，これに「無学，文盲(want of learning, illiteracy)」という語義しか与えていない．私が使ってきた「非文学」の意味（つまり文字と個人作家に依拠する文学に対して主として口承と民衆の集団記憶に依拠するものという意味)で illiterature という語を使ったのはフリードマンがはじめてでないかと思う．フリードマンは，さらにいう「文学的詩歌の物的媒体は書かれたあるいは印刷された文字（*litera*）であるのに対し，バラッドは，少なくともその本質が確立された時代においては，文字にまったく依拠せずバラッドの歌い手と聴き手の集団的記憶の中にのみ存在していた」（Introduction, x）と．だからこそバラッドは「非文学」なのだ．フリードマンのバラッド論の明快さは，文字（*litera*）を媒体とする文学と，本来，文字を媒体としないバラッドとをはっきり区別する明快さなのだ．私は，この区別を当然だと思うのだが，なんとかしてバラッドを文学の枠の中で考えよう，あるいは「文学研究」こそバラッド研究の本筋であるという主張が，いまでもなされる日本の学界では，フリードマンの明快さは，いたずらに異端視されるだけかもしれない．

私はいままでホジァートのいう“the little traditions”が私の考える「非文学」の概念にいちばん近いように思っていたが，フリードマンの“illiterature”は，それよりも数等近いのである．おおよその考え方だけでなく用語に至るまで，一素人のバラッド非文学説と専門家の balladry＝illiterature 説とが奇しくも一致するのは，素人たる私としては，すなおに喜んでいいはずなのだが，なんとなく自説が横取りされたようで口惜しい気がしないでもない．そのうち，平野の説くところは，フリードマン説の引き写しにすぎない，としたり顔で指摘するケイガンの士が出てこないとも限らないからである．これは，しかし，予防線を張ってみたところで，しかたのないことであろう．

フリードマンの省察の鋭さは，バラッド＝非文学という指摘にみられるだけではない．バラッドの伝承過程を論じてフリードマンはこう説く．「バラッドは伝承として生きている限り，その形態はけっして固定しない．変容は絶えず起こり，あるいは改良されたり，あるいは崩れたりする．また採集者が記録にとどめても変容は続く．したがってバラッドは詩と違ってさまざまの別形や変形をもつ．記録されたさまざまの別形は，その千変万化する伝承過程の中の，ある限られた時期とある限られた場所におけるそのバラッドの姿を示しているにすぎない」（*Introduction*, xxxiii-xxxiv）と．童謡や民謡などの伝承文化は，伝承として生きている以上，たえずその形を変えていく．それが伝承の本質である，ということを，私もいままで伝承文化を説くときに繰返し述べてきた．また伝承されている別形のあいだに欽定版（authorized version）は存在しえず，それぞれの別形は，同等に「正しい」ということを指摘してきた（たとえば拙著『マザー・グースの世界』188ページ以下参照）．これは，私が伝承童謡や伝承歌謡とつきあっているうちに，おのずから到達せざるをえなかった結論の一つだったが，英米の学者の中でフリードマンの伝承のとらえ方が私のにいちばん近いように思われる．私の伝承文化のとらえ方がけっして独断的なものでないことを，はしなくもフリードマンが証明してくれた形になったので，これも大いに喜ぶべきことかもしれないが，私の気持は，ちょっと複雑である．別の道をたどっても，行きつくところは同じ，というだけのことかもしれないが．

ところで，こういう洞察に満ちた，しかも20年以上も前から出ているこのバラッド選集の評価がきわだって高いということを，寡聞にして私は聞いていない．フリードマンの明快な解説が評判になったことがあるのかどうか．なるほど *The New Yorker* 誌は，かつて“his exposition is dramatically clear”とフリードマンの解説を絶賛したことがあるらしいし（表紙刷込みの広告文による），私もこんどはじめて目を通して *The New Yorker* 誌の書評が過褒でないことを納得した次第だが，バラッド研究家にとってフリードマンの業績は「必読文献」という status をまだ得ていないのでないかと思う[1]．もっとも，前に告白したように，私は特に日本におけるバラッド（あるいは伝承文化）研究の現状に暗いので断定的なことはいえない．ただ，なんとなくそういう感じがするのである．あるいは，フリードマンの所説を踏まえた発言がなされる水準に，日本のバラッド研究は，まだ達していない，ということなのかもしれない．

フリードマンの説くところに私はことごとく賛成というわけでは，もちろんない．フリードマンは選集の序文の最後のところで，最近（といっても1950年代のことだが）の folk song “revival”に言及し，この「復興」に

1) ただし Hodgart は Friedman の影響を強く受けていることを認めている（*Faber Book of Ballads* の序文参照）．

よって伝承バラッドがよみがえることを期待してはならない，と警告している．文明の時計の針を逆に戻さない限り，バラッドは伝承として生き返ることはありえない，というのが氏の考えらしい．氏は伝承に対して悲観的であり，民謡「復興」の運動に対して否定的である．この点，私はフリードマンと見解をいささか異にする．こんな口幅ったいことが言えるのは，60年代と70年代の主としてレコードを通しての「復興」運動との，私なりのつきあいが，こちらにあるからである．ただし，フリードマンが，その後20年間，民謡「復興」運動に対して否定的態度を持ち続けていたかどうか，私は知らない．

## 音声資料の価値

個々のバラッドについてなにかいう場合，私は音声資料をよりどころにすることが多い．伝承バラッドの中に音声資料がなにも残っていないバラッドの方がはるかに数が多いはずだが，活字でしか接することのできないバラッドは，なかなかこちらのバラッド体験にはなりにくい．そのバラッドの梗概や内容をいちおう知っていても，そのバラッドの雰囲気あるいは体臭といったものが伝わってこないのである．私の心に強く刻印されているバラッドは，例外なくだれかの歌声（あるいは朗唱）と不可分に結びついているものばかりである．たとえば妻の裏切りをうたった「ブラックリー男爵」（チャイルド #203）というスコットランド北東部を舞台にした凄じいバラッドにしてもマッコール（Ewan MacColl）の迫力ある歌い方[2]と切り離して私は考えることはできない．その後，聞くことをえた同じスコットランドの伝承歌手レッドパス（Jean Redpath）の歌いぶり[3]も魅力があり，なにかの拍子にふとそのメロディーが浮かぶことがあるが，マッコールの歌によってつくられた私の中の「ブラックリー男爵」の世界は，容易にそのイメージを変えようとしない．

といって，伝承の真の姿を伝えるのは活字ではなく，音声資料である，と言い切るつもりは私にはない．フォークソング歌手（たとえばジョーン・バエズなど）が美しい編曲でバラッドを歌っている場合は論外として（私はこれもバラッド伝承の一つの姿とみるものだが），英米で現実に伝承されている（あるいは伝承されていた）姿を忠実に記録にとどめた音声資料（BBCやアメリカ国会図書館のもの）にしても，それがそのまま伝承の姿ということにはならない．伝承は生きているかぎり，たえず流動するものであり，流動の過程が伝承なのである．レコードやテープによる忠実な録音も，その流動のプロセスを一時停止させてとらえた一コマ，一断面にすぎないのであって，映画にたとえるなら一枚のスチール（still）に当たろう．だれもスチールを映画そのものと考えないように，レコードなどの音声資料を伝承と同一視するわけにもちろんいかない．しかし，そういう限定を認めながらも，音声資料の方が，たんなる活字資料より伝承の姿を生き生きと伝えるということは否めないように思う．ピンで留めた蝶の標本は，空を自由に飛び回る蝶とははなはだしく異なるが，それでも文字や図版で説明された蝶よりは，実物に近いイメージを見る人に与えてくれるはずである．音声資料も，生きている蝶ではないが，標本程度に生きた蝶（伝承）の姿を現前させてくれるものである．

## フリードマンの選集

私はフリードマンの序文にかかわりすぎたかもしれない．フリードマンのこのすぐれたバラッド選集そのものにも触れなければなるまい．フリードマンの選集の特色は，採録した計144篇のバラッドをその内容（テーマ）によって15項に分類したことと，その選択の範囲を伝統的なチャイルド・バラッドに限定せず，アメリカで生まれたバラッドをも含めた点にあろう．地域的にイギリスの外に範囲を広げるのは別段珍しいことでなく，たとえばリーチ編 *The Ballad Book*，ホジァート編 *The Faber Book of Ballads*，グリッグソン編 *The Penguin Book of Ballads*（1975）などいずれもアメリカ産のバラッドを収録しており，フリードマンの選集独自の特色とはいいかねる．しかしテーマ別というのはバラッド選集としては異色であろう．チャイルドの大集成も大ざっぱには内容の類似したものを同じところにまとめてはいるが，はっきり内容別の分類になっているわけではなかった．

この連載で私はいままでいくつかのバラッドを採り上げ解説を試みてきたが，バラッドの選択が筆者の好みに偏っていた点は否めない．フリードマンの掲げる15項の分類に照らし合わせてみると筆者のバラッド選択がどういうふうに偏っているのか，またバラッドの世界が実際はどれほど多様で豊かなものか，もっとはっきりするように思う．

この選集でフリードマンが使う分類は次のようになっている（括弧内のアラビア数字はその項に収録されてい

2) *English and Scottish Folk Ballads*（Topic Records, 12 T 103）に収録．
3) *Jean Redpath's Scottish Ballad Book*（Elektra Records, EKL-214〔現在廃盤〕）に収録．

るバラッドの篇数). Ⅰ. Ballads of the Supernatural (17); Ⅱ. Religious Ballads (4); Ⅲ. Romantic Tragedies (12); Ⅳ. Love and Sentiment (9); Ⅴ. Pastourelles (3); Ⅵ. Domestic Tragedies(7); Ⅶ. Tabloid Crime(13); Ⅷ. Criminal Goodnights(8); Ⅸ. Ballads of the Scottish Border(9); Ⅹ. Historical Ballads(8); Ⅺ. Accidents and Disasters(9); Ⅻ. Outlaws, Pirates, Badmen, and Heroes(18); XIII. Songs of the Forecastle and Lumber Shanty (10); XIV. Cowboy and Frontier Ballads(10); XV. Humor(7).

いままで本稿で取り上げた主なものをこの分類に当てはめてみると "The Wife of Usher's Well"(Child #79) はⅠの超自然のバラッド，前回紹介した "The Cherry-Tree Carol"(#54)と "The Bitter Withy" はいうまでもなくⅡの宗教的バラッド，"Edward" (#13) がⅥの家庭悲劇，"The Cruel Mother" (#20) や "Bo Lamkin" (#93) はⅦのタブロイド犯罪（三面記事的なセンセーショナルな犯罪），というふうに15の分類の中のせいぜい4つぐらいにしかわたっていないことが分かる．もっとも第14項のカウボーイとフロンティアの唄となるとアメリカ生まれの民謡ばかりになるので，私たちのバラッドとは，ちょっとつながらない．しかし爾余の14の分類項目の中には，それぞれチャイルドの伝承バラッドが収まるのである．比較的よく知られたバラッドを各項毎に1篇ずつ挙げるなら次のようになる．

Ⅲの「ロマンチック・バラッド」にはご存じ「バーバラ・アレン」(#84)，Ⅳの「愛と感傷」には「処刑台から解放された乙女」(#95)，Ⅴの Pastourelle（羊飼い乙女）というのは分類としてちょっと無理なような気もするが「ナイトと羊飼い乙女」(#10) というのが典型的，Ⅷの「犯罪者の辞世の唄」には「メァリー・ハミルトン」(#173)，Ⅸの「スコットランド国境のバラッド」には「美しきマリー伯」(#181)，Ⅹの「歴史的バラッド」には「ジェーン女王の死」(#170)，Ⅺの「事故と災難」には「サー・パトリック・スペンス」(#58)，Ⅻの「無法者，海賊，悪人，および英雄」には「ヘンリー・マーティン」(#250) やロビン・フッド関係のバラッド，XIIIの「船乗りの唄と樵の唄」には「黄金ヴァニティー号」(#286)，そして最後XVの「ユーモア」には特にアメリカで人気のある「農夫の呪われた女房」(#278) などがそれぞれ収録されている．

このような分類を参考に，たえず全体のバランスに目を配りながら解説の筆を進めるなら，本連載も英語伝承バラッドのもっと均衡のとれた案内となりえたかもしれないが，筆者は別にバラッドの世界全般についての過不足のない概説や概観を目指しているわけでないので筆者個人の好みによる叙述の偏りや不均衡は大目にみてもらう，ということにしたい．

幸か不幸か，私は音声を通して感銘した作品でないと，その素性などを活字資料その他で調べてみる気になかなかなれない．耳に響いてくるものがないことには，そのバラッドの映像がはっきりせず，イメージが浮かばないし，解明の意欲も湧かないのである．

「超自然のバラッド」はフリードマンの分類のトップに来るだけあって，この項にはバラッド特有の魅力をたたえた佳篇が多い．この選集に収録されている17篇をみると，ほとんど例外なくそれぞれ歌曲としてもすぐれていることに気付く．「家大工」(#243) にしても，「静かならざる墓」(#78) にしても，繰り返し聴くに耐えるだけの美しい調べをもっており現代の民謡歌手のだいじなレパートリーとなっている場合が多い．特に「家大工」などはイギリスの Steeleye Span とか The Pentangle といったロック・グループのレパートリーにも入っており，両者の演奏[4] を聴き比べたりしていると，バラッドはもはや伝承としては消滅したというような俗見（フリードマンの考え方はこれに近い）など，どこかへ吹っ飛んでしまうような気がするのである．（この稿続く）

（東京大学教授）

4) 前者は *Commoners Crown* (Chrysalis Records, CHR 1071) に，後者は *Basket of Light* (Transatlantic Records, IRP-80748) にそれぞれ収録．


# 英語展望合本

第5巻 Nos. 49—60 ¥6,500

本誌合本第5巻 (Nos. 49—60) が発売中です．ご希望のかたはお近くの書店または ELEC 出版部（〒101 千代田区神田神保町 3—8 替替 東京3—11798)にお申し込み下さい．

●**特集記事** 英語教育の現状と改革の方向(2)—(4) 平泉渉氏の提言をめぐるパネル・ディスカッション，対談，アンケート等を特集／マザー・グースのすべて 平野敬一・谷川俊太郎他／異文化間コミュニケーション(1)，(2)／日本の英語教育の発展のために／English Education in Japan／どんな英語を学ぶべきか(英文)／国際人の条件

# 命令文・インペラティブ・言語と文化*

原　口　愚　常

## 1. はじめに

英語と日本語を比べる際に，あるいは，われわれが英語を学ぶ際に，英語と日本語の違いが問題にされ，人々の注目を引くことが多い．英語を学んでいるうちに気がつく両国語の相違の1つとして，英語では命令法（インペラティブ・ムード）が使えるのに，それに対応する日本語では，命令形を用いた命令文（以下単に命令文と言う）が使えないことが多いという違いをあげることができる．たとえば，英語の

(1) a. Keep America beautiful.
　　b. Please open the window.

に対応する日本語は，通例，

(2) a. アメリカをきれいにしよう（しておこう）．
　　b. 窓をあけて下さい（くれませんか）．

のようになり，

(3) a. アメリカをきれいにせよ（しておけ）．
　　b. (*どうぞ）窓をあけよ（あけろ）[1]．

のような命令文に対応することはまずありえない．また逆に，(2b）に対応する命令文でない英語の表現を探そうとしても，まず見つからないのではないであろうか，

このような観察に基づいて両国語の違いをもっと一般的な形で述べるとすれば，英語ではインペラティブがかなり自由にかつかなり広く使われるのに対して，日本語では命令文が用いられるのがかなり限られており，命令文を目にする機会も，第5節で見るような場合を除けば，少ないと言うことができるであろう．

しかしながら，英語のインペラティブが日本語の命令文に相当しないことがあるということは，両者が対応することがまったくない，ということを含意する訳では勿論ない，ということを念のため断わっておきたい．ものによっては，あるいは，状況によっては，英語の命令文が日本語の命令文に対応することは，決してまれではない．たとえば，クワーク他（1972）の

(4) You be quiet.

のような文は，ほぼ，

(5) おまえら，静かにしろ．

のような命令文に対応するのである．

このような場合があるにしても，英語の命令文に対応する日本語の命令文が使えないことが多いということに変わりはない．ということであれば，英語では命令文が比較的自由にかつ大量に使われるのに，日本語では命令文の用いられ方がかなり限られているのは一体なぜなのであろうか，という疑問が当然わいてくるであろう．まず，この点について考えてゆくことにしたい．

このような問いに対する答えとしては，いろいろ考えられ，一筋縄では解決がむつかしそうにも思われる．しかも，その要因は1つに限られているのではなく，いくつかの要因がからみ合っている可能性が大であるようにも思われる．

たとえば，社会の民主化が成し遂げられているかどうかというように，言語以外のところに答えを求めることも考えられないことはない．しかし，その前にまず言語そのものの仕組みの中にその答えを求めるのが常道であり，最も良い方法であると思われる．

言語文化現象のかなりのものは，言語のくわしい分析によって解決が可能であるということを，筆者はこれまでの研究から，確信している．英語では命令文を比較的自由にかつ多量に用いることが可能であるのに，日本語ではその用い方が限られているのはなぜか，という問いに対する答えは，まず何をおいても，言語の仕組み自体に求めることができるのではないかと疑ってみることが大切である．この場合に，その答えは，およそ次のようになるであろう．すなわち，英語では，その仕組み上，命令文がいろいろな意味あいで用いられるのに対し，日

* 本稿は，1977年7月22日に行われた筑波大学公開講座（英語）における講義に加筆修正をほどこしたものである．草稿に目を通して貴重な御教示を与えて下さった安井稔教授，斎藤武生助教授に御礼を申し上げる．なお，本研究は，51～52年度の科学研究費の援助のもとに行われたものである．

1) (*)は，その中にある「どうぞ」の部分が(b)の文に付け加わると，(b)の文がおかしな文になる，ということを示すものである．

本語では命令文の意味と用いられ方が限られているというところにそもそも原因があると言ってよいことになるであろう.

## 2. 日米命令文の種々相

それでは，英語と日本語の命令文は，それぞれ，どのような仕組みになっており，どのような違いがあるのであろうか．まず手始めに，日本語の命令文から，この点に関して検討を加えてゆきたい.

日本語の命令文は，その字のごとく，上位の者が下位の者に対して下す「命令」の意味が中核としてあるだけである[2]．これに加えて，日本語では，上位の人が下位の人に対して指示を行う場合にも，命令文を避けようとする傾向が見られる.

たとえば，先生が生徒に言いきかせる場合でも，

(6) 廊下を走るな／静かにしろ.

と言うよりは，

(7) 廊下は走らないようにしよう（ね）／静かにして下さい（しなさい，しましょう）.

というような言い方をすることが通例は多い．(6)のような言い方をする人は，ぶっきら棒な言い方を好む人か，あるいは，感情的になったり，あるいは，どなりつけたりする場合などの特殊な状況に限られている．しかも，

(8) 静しゅくに.

というような省略表現を用いたり，

(9) a. 禁煙.
　　b. 小便無用.

などの体言止めを用いたり，

(9) c. 廊下を走らない／静かにする.

というような直説法を用いることによって，命令を表わそうとすることもある．つまり，命令を下す場合でも，(6)のように直接的に命令法を用いるよりも，別の言い方が好まれるという傾向がある，ということである.

このような傾向が見られるのは，命令法の性質上，反感を買ったり，潜越な印象を与えるのを避けようとする意識が働くことや，言い方をやわらげようとすることなどの要因が作用しているからであると思われる．このような傾向が生ずるのはおそらく，日本の文化が本質的に自発の文化であるからではないであろうか．この点に関しては別稿で触れることにし，ここでは立ち入らない.

以上見てきたことをまとめると，日本語の場合は，命令文のもつ意味と機能と用法が，本来的に限られていることに加えて，直接的な命令法を避けようとする傾向が強いために，命令文が用いられるのがかなり限られているということを述べたことになる.

一方，英語の場合はどうであろうか．英語の場合には，命令文は意味上も，用法上も，日本語よりはるかにその運用の範囲が広い．ということは，英語の命令文は，哀願・依頼・要求・命令・勧誘・おどし等々に用いることができるということである．しかも，例えば命令を表す場合でも，地位の上下を必ずしも前提としないで命令を用いることができるのである.

急いで付け加えるが，このような言い方をすることは，英語で命令を表す場合，地位の上の人が下の人に下す命令であるということがはっきりしているものはない，ということを意味するものでは決してない．たとえば，カイザー・ポースタル（1976, 75〜6）で指摘されているように，you の付く命令文である，

(10) a. *You* open that window.
　　b. *You* get out of here right now.

のようなものは，話者が，命令の対象となっている人よりも上に位置する場合にのみ用いることが可能である．同様の指摘は，クワーク他（1972, 403）でも見られる．それによると，(4)や

(11) You mind your own business and leave this to me!

のような命令は，通例，地位の上の者が訓戒をたれたり，非難などを表すような調子で言う場合に用いられるものであり，しばしば強いいらだちを表すという.

さらに，呼格（ヴォーカティブ）を含む次のような文について見てみよう.

(12) a. Woman,
　　b. Women, } get up and fight!

(13) a. Come on, man,
　　b. Come on, men, } it's time to move.

ツヴィッキー（1974, 794）によれば，例えば（12a）は，男性が相手の女性に話しかける場合に用いられるが，(12b）や（13b）と同様，話者の方が話しかけられる相手より上に位置していることを示している．また，(12b)は，権威をもつ人が女性に向かって専横な調子で話しかけるときに用いられる．同様に（13b）も地位が上で権威をもつ人が男性に向かって話しかけるときに用いられる．ところが，(13a）の場合には，話者と話しかけられた相手の間に地位の上下関係・権威の有無といった点に関する違いがなく，男性でも女性でも（13a）を用いて

2) 日本語の命令文で，命令を表さないものとして，次のような祈願文としての命令文がある.
(i) 明日天気にな（ー）れ！
(ii) 大きくな（ー）れ，大きくな（ー）れ！
が，これらの祈願命令文は，動詞の命令形の部分を長音化することができるという点で，「命令」を表す命令文と異なっている.

よく，しかも話しかけられる相手は，必ずしも男性に限らなくともよい．

このように見てくると，英語の命令文の中にも，話者の方が上位に属する場合にのみ使われるような種類のものもあることは明らかであろう．以上の所見に基づけば，「アメリカは民主主義の国だから，日本のような地位の上下関係を示すような命令文はないのではないか」と考えるのは誤りであるということに疑問の余地はないであろう．

なお，日本語では，直接命令文を使うことを避ける傾向があると述べたことに関して一言付け加えておくべきことがある．それは，英語でも，状況によっては，命令を使わないこともあるということである．一例をあげると，命令文を用いて，

(14) Don't do that.

と言う代りに，

(15) If I were you, I would not do that.

のような仮定法を用いることがある．しかし，このような傾向は，状況によってはかなり見られるとは言え，おしなべて言うなら，命令形に please などを付けたりして命令文を用いる形が，アメリカでは多く用いられるように思われる．

以上見てきたことは，英語の場合は命令がいろいろな意味を表す機能をもっており，しかも，直接命令を避けようとする傾向が日本程強くないということである．このように見てくれば，英語では命令文が比較的自由にかつ多く用いられるのは，上で見てきたような言語的・慣用的理由によるものであるということが納得できるであろう．

### 3. 命令文と広告

英語と日本語で，命令法による命令文の用い方に違いが見られるということを，比嘉（1972）では，アメリカと日本の広告に命令文がどの程度現われるかを調べて，明らかにしている．同氏によると，アメリカの広告では約62パーセントが命令法を用い，直説法を用いたものは32パーセントであったのに対し，日本の広告では，命令法を用いたものは実質的にゼロに近く，“Xをどうぞ”とか“X をお試し下さい”等々の間接的命令形式を用いたものが30パーセントで，残る70パーセントは直説法を用いているという．

そもそも広告は，「こういう良い商品がありますよ」と知らせ，買おうと思っていない人をも買う気にさせるというところに，主たる目的があると言ってよいであろう．ということであれば，この広告の本来的性質および，命令法による日本語の命令文の意味と機能から，日本語の広告に命令法が使われることはゼロに等しいということが，自動的に導かれる．すなわち，すでに見たように，日本語の命令文の中核は，地位の上の者が下の者に下す「命令」を表わすことにあるから，それが広告で使われたとしたら，普通の人はひどく反発するだけで，その品物を買おうと思っていた人でも買うのを控える恐れがあるのである．したがって，そのようなマイナスの反応を引き起こすような表現が使われることはまずない，ということになるのである．

種々の間接的命令文と言われるもののうち，

(16) a. X を飲みましょう．
　　b. 贈り物に X を（どうぞ）．
　　c. X をお試し下さい．
　　d. 試してみませんか[3]．

のような表現が好んで用いられている．(16)において，(a)はお誘いを表し，(b)はおすすめを表し，(c)はお願いを表し，(d)は疑問文の形式を用いて，お誘いプラスおすすめを表している．ということは，(16)の文は送り手の方が受け手より上にあることを示すものではないということを意味する．このため，これらを聞いて反発を感ずる恐れは普通はありえず「そんならひとつ～してみるか」という気を起こさせる蓋然性が高い．したがって，これらは，命令法を用いた命令文とは違って，広告に用いることが可能なのである．

一方，英語では，命令法を用いて，

(17) a. Drink Coca Cola.　コカ・コーラを飲もう．
　　b. Buy now.　今がお買い得です．
　　c. Save 20%　20%もお買い得．

のような命令文を用いることが多い．英語で(17)のように言えるのは，これらの命令文が文字通り「命令」を表しているのではないからである．つまり，(17)では(a)はお誘いであり，(b)と(c)はおすすめの意味なのである．視点を変えて言うと，英語で命令法が広告で使えるのは，おすすめ，お誘い，お願い等々を命令法が表すことができるようになっているからなのである．

このような所見は，命令法の意味が，上位の者が下位の者に下す命令・指令・要求であることがはっきりしている場合には，英語でも命令法を広告に使えないということを示唆する．事実はこれが正しいことを示している．たとえば，you を付けたり，woman, women, men などの呼格をつけたりして作った

(18) a. **You* drink Coca Cola!
　　b. **Women*, buy now!

3) 以上の例はすべて比嘉1972より引用したものである．

c. **Men*, save 20%

のような命令文は，広告に現われることはない．なぜなら，you を付けたり women 等の呼格をつけると，上位の者が下位の者に命令を下すことになるからである．広告の目的からして，このような種類の命令文と広告が相入れないことは，日本語に関してすでに述べた通りである．

以上，アメリカの広告で命令文が多く使われるのは，命令文の意味と機能上，それを使うことが一向に差しつかえない仕組みになっているからであること，および，どんな命令文でも使えるのではなく，一定の意味をもつ命令文は広告では使えないということを論じたことになる．

### 4. 肯定命令・否定命令

命令文に関する興味深い事柄に，肯定命令文と否定命令文の関係にまつわるものがある．肯定と否定は密接な関係にあるのだから，肯定命令文があればそれに対応する否定命令文があるはずだと思うのが普通であろう．事実，次の例のように両方共にそろっているのが多いことは確かである．

(19) a. Go.　　行け．
　　b. Don't go.　行くな．

(20) a. Open the door!　　戸をあけろ！
　　b. Don't open the door!　戸をあけるな！

しかし，肯定命令と否定命令が常にこのように対応している訳ではない．日本語の例から考えてゆくと，たとえば，

(21) a.　　落ち着け．
　　b. ??　落ち着くな．

(22) a.　　しっかりしろ．
　　b. ??　しっかりするな．

のように，肯定命令はよいけれども，否定命令はおかしいものがある．一方，たとえば，

(23) a.　　あわてるな．
　　b. ??　あわてろ．

(24) a.　　落胆するな．
　　b. ??　落胆しろ．

のように否定命令は正しいけれども，肯定命令はおかしいものもある．

また，たとえば，

(25) a. 頭を冷やせ．
　　b. 頭を冷やすな．

のような表現は，肯定も否定も存在している．が，(a)はあいまいで，文字通り氷か何かで頭を冷やすべしという意味と，比喩(*)的に冷静になれという意味の2つがある．ところが(b)のような否定命令は，頭を物理的に冷やすなという意味だけで，比喩的な意味は存在しない．

同様に，安井泉氏が指摘したように，

(26) a. 目を開け．
　　b. 目を開くな．

も，(a)は文字通りの意味と比喩的意味の2つがあるが，(b)は文字通りの意味しかない．つまり，これらの例は，肯定命令の場合には文字通りの意味と比喩的意味の2つが可能な場合でも，否定命令になると比喩的意味が消えることがある，ということを示している点で興味深い．

ところで，この逆に，否定命令では文字通りの意味と比喩的意味の2つがあるが，肯定命令では文字通りの意味だけ（あるいはいずれか一方だけ）になる場合はあるであろうか．ちょっと見たところではないかのように思われるかもしれないが，実はあるのである．例えば，

(27) a. 油を売るな．
　　b. 油を売れ．

のようなものをあげることができる．(a)の「油を売るな」は文字通り「油を（お金で）売ってはいけない」という趣旨の意味と，「道草を食ってはいけない，途中でサボるな」という比喩的意味の2つがある．しかし，(b)の「油を売れ」は通例は文字通りの意味だけである．

上で見た2つのタイプの他にもう1つ論理的に可能なタイプとして，肯定命令でも否定命令でも文字通りの意味と比喩的な意味の両方が出てくるものがあるはずである．このタイプに属する実例も確かに存在している．たとえば，

(28) a. 首を切れ．
　　b. 首を切るな．

の場合は，(a)(b)共に文字通り首を物で切る場合と，解雇するという比喩的意味とがある．

(25-26)，(27)，(28)の3種の例は，それぞれ，(21-22)，(23-24)，(19-20)の例に対応している．したがって，(27)で「油を売れ」という表現に比喩的意味がないのは，

(29) a.　　道草を食うな．
　　b. ??　道草を食え．

において，(b)がおかしいという事実と平行関係にあるということになる．また，(25)や(26)の(b)に比喩的な意味が消えるのは，

(30) a.　　冷静になれ．
　　b. ??　冷静になるな．

(31) a.　(i)しっかり見ろ．/(ii)わかるようになれ．
　　b. ??(i)しっかり見るな．/??(ii)わかるようになるな．

のような例において，それぞれ，(b)がおかしいことと平行関係にあるのである．

上で日本語に関して見てきたのと同様に，英語でも肯定命令はよいが否定命令はおかしいものと，否定命令はよいが，肯定命令がおかしいものがある．たとえば，神尾氏が指摘するように，to calm oneself や to take it easy のようなものは，

(32) a. Calm yourself.
b. Take it easy.

のように，肯定命令ではよいが，否定命令にはならない．

(33) a. *? Don't calm yourself.
b. *? Don't take it easy.

一方，to worry about it, to lose one's head のようなものは，

(34) a. Don't worry about it.
b. Don't lose your head.

のように否定命令となることはあっても，

(35) a. *? Worry about it.
b. *? Lose your head.

のような肯定命令はおかしい．したがって，この点に関するかぎり，日本語と英語は共通部分がかなりあると考えてよいであろう．

上の日英語の例を観察すると，肯定命令がよくて否定命令が悪い場合には，動詞句が好ましい事柄を表す場合(専門的に言うと〔+evaluative〕な場合)であると言える．一方逆に，否定命令がよくて肯定命令がおかしい場合は，動詞句が好ましくない事柄を表す場合である．つまり，好ましくない意味の動詞句の場合には，否定されることによって，好ましからざる意味あいが消えるから，否定命令が可能となるのである．

広告における命令文の場合には，日本語と英語で大きな違いが見られたのに対し，肯定・否定命令という点では，両言語の共通性は相当のものである．これは，肯定・否定という要因と，好ましいもの・好ましからざるものという要因が，かなり普遍的なものである，ということと関係しているためであろう．

### 5. 日本語の命令文の頻出領域

これまで，日本語の命令文に関して述べる際に，命令文を用いるのを避けようとする傾向があること，また，用いられる量も少ないことを述べてきた．次に，命令法を用いた命令文が頻出する部分に関して概観しておきたい．

命令文が頻出する領域は大きく分けて2つある．1つはインフォーマルな口語においてであり，もう1つは，標語・俳句・歌など文芸・文語に属する領域である．

まず口語で命令文がよく出てくるのは，非常に仲の良い子供の間で用いられる口語の場合である．たとえば，

(36) a. 早くやれ，バカ．
b. そんなことやんな（＝やるな）．
c. のけのけ．

等々の命令文がよく用いられているようである．ただし，(36)は，子供だけでなく大人も使っている．同様に，仲の良い間柄でよく用いられる命令文には，

(37) a. うそつけ．
b. あほぬかせ．
c. 顔を洗って出なおしてこい．
d. やれよ，遠慮すんな（よ）．

等々のようなものもある．このうち，(37)の(a)と(b)は，形は肯定命令ではあるが，その意図するところは，否定命令である．

この種の構文については，別のところで肯否一如表現と名付け，

(38) a. うそつくな．
b. あほぬかすな．

といった否定命令との違いについて論じた．これらの口語でよく用いられる命令はインフォーマルであり，ごくごく親しい間でしか用いられないという点で，特殊なものであると言ってよいであろう．

これらの命令文を用いてよいのは，ぶっきら棒に言っても差し障りのない間柄に限られている．これと似てはいるが，多少違うのは，ドロボウやならず者などが，

(39) a. 動くな．
b. 早く歩け．
c. どけ！

というような場合である．また，しばらく前の大学紛争のときの過激派学生の

(40) a. 言えよ．
b. 逃げるな．
c. 土下座してあやまれ！

といった罵声などもあげることができよう．(39)はおどしであり，(40)は用法を意図的に無視して敵意を表わし，かつ，おどしをも含む命令文であると言ってよいであろう．

第二に，命令法を用いた命令文が多く用いられる領域には，たとえば，

(41) a. 飛び出すな，車は急に止まれない．
b. 乗るなら飲むな，飲むなら乗るな．

等々の標語や，

(42) a. やれ打つな，ハエが手をする足をする．

b. やせガエル，負けるな一茶これにあり．

といったような俳句や，

(43) a. 泣くな，よしよし…

b. どんとやれ，男なら人のやれないことをやれ

c. 見よ，精鋭の集うところ…

等々の歌とか，

(44) a. 被告は…支払え．

b. …すべし．

c. おのが姿を見よ．

等々の文語体の文や改まった言い方の文などが含まれる．これらの場合には，普通の場合よりも命令法を使うことが多く，また使っても一向に差しつかえない．(41), (42), (43)のような場合に，命令法などを用いてもかまわないのは，口調を整えるのに不要なものを切り捨てなければならないからである．と同時に，文語であるということも関係していると思われる．比嘉氏によれば，文語体の場合には，広告などでも，かつては，

(45) a. 行動せよ．

b. 聞け．

c. 買うべし．

といったように命令形が用いられていたということである．

以上見てきたことは，日本語では命令法が用いられることが少なく，避けられる傾向が普通の場合には見られるが，一定の条件のもとでは，命令法を頻ぱんに用いることができるということである．これらの場合に命令法が用いられるのは，それらを用いても，差し障りがないような状況があるからである，というところにその理由があると言うことができるであろう．すなわち，和歌・標語などでは，目の前にいる聞き手に直接ものを言うのではないということに加えて，例えば標語では，命令形を用いてもその意図は「～しよう」という誘いである，というような理由があるから，用いてもよいのである．

## 参照文献


Haraguchi, Gujô (1976) "On Imperative *Koto*-Phrases in Japanese," *Descriptive and Applied Linguistics*. 9. 19–46.

原口愚常(1976)「負の世界」筑波大学言語文化研究会第一回例会(11月19日)にて口頭発表．

原口庄輔(1976)「否定の磁場—「車は急に止まれない」をめぐって」『月刊 言語』5:8. 68–73.

Higa, Masanori(1972) "The Use of the Imperative Mood in Postwar Japan," W. P. Lebra(ed.) *Transcultural Research in Mental Health*. Honolulu: Univ. Press of Hawaii. 49–56.

神尾昭雄(1971)「ある種の選択制限の性質について」『明治学院論叢』174号．159–86.

Keyser, Samuel Jay, and Paul M. Postal (1976) *Beginning English Grammar*. New York: Harper & Row.

Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.

Zwicky, Arnold M.(1974) "Hey, Whats your name!" LaGaly, M. W. *et al.* (eds.) *Papers from the Tenth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*. 787–801.


---

(p. 41よりつづく)

言う．これは次のようなやり方をする．that 節と不定詞をとる動詞をなるべく多く取り上げ，それを使って生徒に文章を言わせる．

(68) I hope to get a raise.

(69) I hope that I will get a raise.

そしてその時，that 節の中に will が来ることに注意させる．同じことを that 節と動名詞を取る動詞についてやらせる．(もちろん，この場合には that 節の中に過去形が来る．) そして結果を表にまとめさせる．

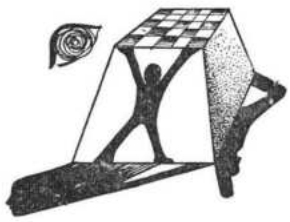
| | *that-clause* | *infinitive* | *gerund* |
|---|---|---|---|
| hope | √ | √ | |
| decide | √ | √ | |
| plan | √ | √ | |
| regret | √ | | √ |
| resent | √ | | √ |

これで大体はっきりすると思うが，まだ不十分であれば，I regret him to come. あるいは I hope getting a raise. が英語として文法的かどうか，たずね，生徒に何が文法的な文かということに対する識別力をつけさせるとなお良い．

**◆まとめ**

以上 B&K の *The Gooficon* の内容の一部を紹介してきた．スペースの関係で触れることができなかったものに global goof と local goof の区別，第6章の心理的な動詞などがある．一読して感じたことは，従来の文法書にはない多くの知見が含まれ，また変形文法の論文のように，やたらとテクニカルな方面に走りすぎることもなく，文法書としてみただけでも大変優れているということである．また，はじめに述べたように，日本人が犯さないような誤りも含まれてはいるが，日本人学生が犯す多くの誤りとその指導法が述べられている．一読の価値が十分あると言えよう．

**(南山大学講師)**



# 言語活動重視の機能主義へ

## ——IATEFL 国際会議から——

橋　内　　武

去る4月11日から4日間にわたって第10回 IATEFL国際会議（組織委員長 W. R. Lee）がロンドンで開かれた．IATEFL とは，International Association of Teachers of English as a Foreign Language の略で，文字通り国際的な英語教育学会で．1967年の創立以来，英国とヨーロッパ大陸諸国で毎年大会がもたれてきた．

会場に当てられた Goldsmith's College には，約550名の参加者が世界各国から集まった．プログラムは，テーマ講演，研究発表，パネル討論，グループ活動のほか，English Teaching Theatre の公演や教育映画3本の上映まであり，多彩で充実した学会であった．また，この国際会議のテーマが "The Teaching and Learning of Communicative Skills (with special reference to English as a foreign or second language)" であったことからもわかるように，言語活動とかことばの機能を重視する立場が会場を支配していたことをお伝えしなければなるまい．構造主義や生成文法への反省を受けて，機能主義の思潮が世界各国で高まってきていることが明白である．（この点については，改めて後述しよう．）

研究発表は100を数え，テキストや辞書の編著者としてわが国でも知られている下記の諸氏の発表もあった．

- L. G. Alexander: "Practical Techniques and Methods"
- R. A. Close: "Communication—Skills, Manner, and Matter"
- J. V. Cook: "Some Activities for Communication and Interaction in the Classroom"
- W. R. Lee: "Sense and Nonsense about Communicating by Language"
- A. P. Cowie: "Vocabulary Learning and Problem Solving"
- J. Windsor-Lewis: "Imparting the Skills for Speech"
- L. A. Hill: "Successful Mass Language Teaching—Communicative Skills Starting at Primary Level"

他方，パネル討論は下記の題目でふたつ行なわれた．

- "In the interests of international communication, is it desirable for English to be simplified, and if so, how can this best be done?"
  Speakers: G. Perren (Director, Centre for Information on Language Teaching), M. Macmillan (Controller, English Language Division, The British Council), W. R. Lee (Editor, ELTJ)
- "How can children learn to communicate in EFL at school?"
  Speakers: L. Billows (University of Erlangen), P. H. Hoy (ex-Senior Staff Inspector, D. E. S.), B. Pattison (University of London)

後者は，この国際会議の中心テーマをめぐる討論であった．それに対して，前者は「国際語としての英語」というこれまた今日的トピックを扱ったものである．この点については，*ELT Documents: English as an International Language* (London: The British Council's English Teaching Information Centre, 1978) 中の諸論文を参照されたい．

さて，グループ活動の方はどうであったか．

グループ A: Learning through doing, or English outside the classroom on children's residential summer courses (ages 10–16)
グループ B: Games for Language Learners
グループ C: Drama in the EFL Classroom
グループ D: Discussing "Activity Days in Language Learning"
グループ E: Role-Playing at Primary Level in EFL Situations

このうち，AとBとCとEは，英語を実際に使って行なえる楽しい学習活動を参加者（教師）みずからが体験する機会となった．英語劇の効用については，グループCの講師 Susan Holden が手をとって教えてくれたし，English Teaching Theatre の公演（第1日目）でも見事にその手本を示してくれた．要は，いろいろな役を演じれば，それだけ学習者のコミュニケーション技能が向上するということ，教師は役者でなければならないということ，やり方しだいで「英語」は実に楽しい教科にな

り得るということである．なお，Dグループは，2日目の晩に上映した表記の映画（製作：ブリティッシュ・カウンシル英語教育研究所）の合評会を行なった．この映画は“Teaching Observed”（製作：BBC）と共に必見の教育映画である．最寄りのブリティッシュ・カウンシルに照会されたい．

さて，国際会議の報告はひとまずここで中断し，機能主義の外国語（英語）教育についてまとめておきましょう．外国語（英語）の教育課程を立案する場合に，最初からコミュニケーションの諸目的を考えようとするのが機能主義の立場です．今まで外国語を学ぶというとき，それはふつう伝達（reporting）という行為を行なう場合に使われる言語をもっぱら習得することにありました．だから，外国語の課程を修めてゆけば，学習者はいくつかの出来事を順を追って語っていくことや，その状況や登場人物について述べることはできるようになりました．

しかしながら，言語というものはただ単に他人に何かを「知らせる」（inform）ためにあるわけではなく，もっと色々なことをするために使われているのです．ちょっと思い浮かんだだけでもずいぶんあります．

1）説明するために
2）評価するために
3）とがめるために
4）悲しむために
5）許しを乞うために
6）承認するために
7）委任するために
8）賞賛するために
9）挨拶するために
10）分類するために
11）仮定するために
12）暗示するために
13）助言するために
14）推せんするために
15）提案するために
16）命令するために
17）祈るために
18）禁ずるために
19）罵倒するために
20）比較するために
21）予告するために
22）教えるために
23）招くために
24）同意するために

このリストはさらに長くなりましょうが，この辺でやめておきます．

要するに，私たちはことばを使っていろいろなことを行なっているのでして，それを言語の機能と呼ぶことにしましょう．今日外国語教育学者が機能主義を唱えるとき，それはこういった言語の機能の側面を大事にしようという配慮からなのです．言語の機能を言語の構造と同じかそれ以上に大切なものと考えることによって，言語教育に対する新しい方向づけが可能となります．

ひとつ例をあげてみますと，従来の学習単元は文法事項から成り立っていたと言えます．ですから，「この課では〈現在進行形〉を扱う」となると，

I am eating an apple.
I am hitting a ball.
I am writing a letter.

といった例文から〈be 動詞の現在形＋～ing〉という一般的な構造形式を示したのでした．

それに対して，機能主義によるアプローチでは言語の機能が学習単元となります．例えば，〈人にものを頼む〉という単位では，

Please help me to move the desk.
Can you help me to move the desk?
I wonder whether you could help me to move the desk.

といった例文が上がってくるでしょう．そして，各々の文がどういう状況で適切な（appropriate）発話となり得るかが問題となるはずです．つまり，コード（code）だけでなくコンテクスト（context）にも神経を払うのです．そのため，一般化を行なうにしてもより複雑な過程を要します．

それから，機能主義のアプローチでは，様々なコミュニケーションのあり方を予想します．話し手・聞き手の関係，話題，スタイル，メディア…といったものの組合せからコミュニケーションのタイプが出てくるでしょう．話し手・聞き手の関係を云々することから，〈役割演技（role-play）〉を重んずることになります．話題や領域や目的によるちがいに気を配るという点で，Language in Use とか English for Specific Purposes と結びつきます．実際の日常生活で起こり得る言語活動に学習の内容を近づけるために，〈生の言語資料（authentic texts）〉をもとにして作られた教材を用いようとします．文法という点では，従来の文レベルの文法に満足せず，談話や文章（discourse）レベルの文法をも取り込み，コミュニケーションの文法を学ぼうとするものです．

こうしてみると，この新しいアプローチの背後に，70年代に急速な発達を遂げた語用論・談話分析・テキスト言語学・社会言語学が，理論上の大きな支えになっていることは明らかです．

IATEFL 国際会議は，4月14日に行なわれた W. Welsing 氏のテーマ講演で実質的には終わった．その講演題目“The Dashing Clockmaker, or How not to Worry about the Swinging Pendulum”がいみじくも示すように，新しい動きに飛び付くのか，振子の揺れに心配せずに旧来どおりにやっていくのか――これは，英語教師ひとりびとりに課されている選択である．

**（ノートルダム清心女子大学助教授）**

# Gooficonについて

ELEC情報・資料の収集および分析研究グループ

有　元　將　剛

本稿は Marina K. Burt および Carol Kiparsky による *The Gooficon: A Repair Manual for English* (Newbury House Publishers, 1971) を紹介するものである．内容を紹介する前に，まずタイトルの意味を明らかにする必要があるだろう．gooficon の意味を知るためには，goof ([gu:f] と発音) の意味を知らねばならない．作者達 (以下 B & K と呼ぶ) によれば，goof とは

① 英語を外国語として学習している学生が犯しがちな誤り

② 1つか，それ以上の goof を含む文

という意味であり，gooficon とは，

① goof を集めたもの

② および，それらを英文法の観点から説明したものである．すなわち，この本の副題が示すように，生徒が犯す間違いをどのように直したらよいかの手引書である．

日本人が犯す英語の誤りを集めたもの，また分析したものは数多くある．(例えば，松本安弘・松本アイリーン共著『あなたの英語診断辞書』(北星堂))．しかし，この本の特色は世界中の英語学習者の英語の誤りを集め，分析していることである．今までの研究の多くが日本語からの干渉を誤りの重要な要素にしているのに対し，B & K はシンタックスに関する大部分の goof は学習者の母国語のシンタックスによるものでないと主張して，母国語と英語を対比すること (contrastive analysis) で誤りを説明しようとはしない．この本は学習者が犯す誤りを分析することにより，多くの違った言語を話す学習者が困難を感じる英語の構造を明らかにしようとするものである．

世界中の英語学習者の誤りを分析しているので，(1), (2) のように，普通の日本人ならまず犯しそうもない goof も含まれている．(†は goof を．〔 〕内は正しい文を示す．)

(1) †He is raining. [It is raining.]

(2) †I know that he sick is. [I know that he is sick.]

スペースの関係もあるので，本稿では日本人が犯しがちな goof にのみ話を限定する．しかし本書に日本人が多く犯す誤りがすべて取り上げられている訳ではない．例えば前置詞の誤りは取り上げられていない．B & K が比較的説明のしやすい goof に話を限っているからである．そして Burt が *From Deep to Surface Structure: An Introduction to Transformational Syntax.* (Harper & Row, 1971) の著者であり，C. Kiparsky は夫君の Paul Kiparsky と共に有名な "Fact" という論文を書いていることからもわかるように，B & K は文法理論として，変形文法を基盤にしている．だから，変形文法が得意な部分——例えば，that 節，不定詞等の補文構造——に重点がおかれ，冠詞の用法などはあまり議論されていない．また，話をシンタックスに限っている．

各章の構成は，(i) goof の分析，(ii) 教授法についての覚え書き，の2つから成り立っている．以下，具体的に主な goof に話を限定して，B & K の考えを紹介していく．

**1.1.3[1]．目的語が欠けている場合**

(3) †At Joey's house yesterday we really enjoyed.

(4) †I need an I-20 form. Please send me as soon as possible.

これらは(5)のルールに違反している．

(5) 英語では代名詞は省略されない．

点線で囲んであるルールは，必ずしもこのルールに従わない英語の文が存在するが，生徒がこれに従えば，必ず正しい文ができるルールである．(B & K はこの種のルールを white lie という．) この場合，(6)が存在するが，(7)も正しいので，white lie である．

(6) Dave got tired and went home.

(7) Dave got tired and he went home.

これに対し，下記の(9)のように，そのルールに違反すれば必ず非文法的な文ができるルールは実線で囲んである．

1) 数字は原著の章を示す．

### 1.1.4. 主語の代名詞の省略

(8) †He worked until fell over.

これは(9)のルールの違反である.

(9) 従属節も主節と同じく，主語と動詞を持たねばならない.

生徒はこれらのルールを学ばねばならないが，もちろん必ずしもルールをそのままの形でおぼえなければならないという訳ではない．ルールの形で生徒にはっきり提示するか，その他のテクニックを使うかは教師にまかされている.

**【教授法についての覚え書き】**

省略の間違いに関して B & K は 2，3 述べているが，そのうち 1 つだけを取り上げると，教師がわざと(10)のように代名詞が 2 つある文を Cue として与え，生徒に 1 つ消した答えを言わせる練習である.

(10) Cue: Where's Harish? I saw him him in school.

B & K は 1 つの him を消して，1 つを残さねばならないと，代名詞を目だたせるという心理的効果をもたらすといっている.

### ◆助動詞について

### 2.1. Do について

### 2.1.1. 疑問文における do の使いすぎ

(11) †Do I must take an entrance exam?

(12) †I don't have gone yet.

### 2.1.2. 疑問文における do の不使用

(13) †Why we bow to each other?

### 2.1.3. 肯定文における do の使用

(14) †I did leave yesterday.

(強調形は今の議論では無視する.)

これらの 3 つの誤りは次のルールに対する違反である.

(15) Do は疑問文，否定文において，助動詞がなければ現われる．それ以外の場合には doは現われない.

この規則は，一見して明らかなように，変形文法でいう Do-Insertion そのものである.

### ◆受動態の誤り

B & K は受動態の誤りを幾つか取り扱っているが，日本人学生（特に大学生等，上級レベルの学生）がよく犯す，次のような誤りを取り上げる.

(16) †I was suggested by Mrs. Sena to forget about this project.

(17) †We were recommended by her to spend less money.[2)]

(18) †Mark was hoped to become a football player.

この誤りは，もちろん日本語からの干渉という側面も否定できないが，英語そのものの複雑さによるものと思われる．というのは，B & K は (19), (20)を非文法的と言っているが,

(19) *We hoped her.

(20) *We suggested her.

(21)は完全に文法的である.

(21) I can recommend this person.

〔『カレッジクラウン英和辞典』〕

このように，この点において，英語自身が systematic でない（あるいは，注 2 で述べたように，方言差がある）からである．もう一つの困難な点は，上記の類の動詞と expect, ask の類の動詞との区別である.

(22) A girl was asked to play the piano.

(23) Dick is expected by Rocky to win the election.[3)]

B & K は ask, expect の類の動詞を 7 つ（allow, ask, assume, cause, claim, expect, permit），suggest の類の動詞を 7 つ (demand, doubt, hope, recommend, say, suggest, think) 挙げ，生徒はどの動詞がどちらのクラスに属するか覚えなければならないと言う.

**【教授法についての覚え書き】**

受動文と能動文の使い分け（すなわち，どのような場合に受動文を使うべきか）は，必ずしも従来の日本の英語教育で重視されてきたとはいえないように思われる．B & K はあるシチュエーションを与えて，それにふさわしい答えを生徒に受動文か能動文か選ばせると，学習を活発に，また興味深いものにするという．例えば，あまり好きになれそうにない男の人にダンスにさそわれた時(24), (25)の 2 つの答え方がある.

(24) I'm sorry, but I've already been invited.

(25) No, Henry has already invited me.

(24)の方が相手にきつくなく，また自分ではどうしようもないということが表わされているし，その上だれがさそったかを相手に言わなくてすむ．このように，ある 1 つのシチュエーションにおける能動文と受動文の働きのちがいを教師と生徒が話し合ってみれば，受動文をどのよう

2) この文を数名のインフォーマント（すべてアメリカ人）にあたってみたが，1 人は文法的と認め，2 人は awkward であり，生徒が作文に書けば絶対訂正すると言い，2人は絶対に使わないと答えた．Hornbyの *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*は (1) を例文として挙げている.

(1) I have been recommend to try these pills for seasickness.

3) Langendoen, D. Terence. *Essentials of English Grammar*. (Holt, Rinehart and Winston, 1970) p. 175 による.

な時に使うべきか自然に理解できるであろう．

◆時の接続詞の誤り

**4.1. limited verb と unlimited verb**

(26) †I'm coming; I only have to finish wearing my kimono. [putting on my kimono.]

(27) †Where did you have your beautiful wife? [meet]

この誤りは，ある時間続く状態や行動を表わす unlimited verb と，始まりと終りの点がはっきりしており，又しばしば短い動作を表わす limited verb との区別ができないため起こったのである．B&K は know と learn のように，しばしば生徒が混同する unlimited verb と limited verb のペア（(a) know: find out/learn, (b) have: get/receive, (c) be: become/get(+p.p.), (d) wear: put on, (e) sit: sit down, (f) keep: put, (g) sleep: fall asleep）を挙げており，大変有用である．

**4.3.3. while**

(28) †While Getachew knocked on the door, I was doing my homework.

while 節はある範囲を示し，その間に主節の出来事が起こったのである．しかし Getachew knock the door は短い行為であり，be doing homework は長い範囲を示すから(28)は誤りである．

**4.5.2. until**

(29) †He died until the doctor came.

(30) †They learned French until their tutor quit.

until を含む文の場合，主節の動詞は unlimited verb でなければならない．従って(29), (30) は非文法的である．until に関して B&K はおもしろい指摘をしている．すなわち，sneeze, tap は本質的に limited verb であるが，繰り返しの動作を表わすことが可能である．ところが，until と共に起るとunlimited verb（すなわち，動作の繰り返し）と解釈される．だから，(31a, b) の両方が可能であり，両者は同じ意味である．

(31) a. He sneezed until the dust settled.
b. He was sneezing until the dust settled.
（同じことが，否定にしたり，a hundred times, repeatedly をつけてもいえる．）

**4.6.2. 完了形のまちがい：while**

(32) †While he has been playing, I am doing all the work.

(33) †She has been making tea while you are sleeping.

これらは(34)に対する違反である．

(34) while を使う場合には，主節と従属節の両方に完了形を使え．あるいは両方に使うな．

**4.6.3. 時制の一致：since**

(35) †I am glad since I came to this country.

(36) †Since you left in the morning we only had a liquid food.

since については次のようにまとめることができる．

(37)

| 主　節 | since節 |
|---|---|
| unlimited（現在完了） | limited（過去）<br>あるいは<br>unlimited（現在完了） |

◆補文構造

**5.2.2. there 構文**

(38) †There is the library key.

(39) †There looked a strange man through the window.

(40) †There are some elephants very ferocious.[4]

この3つは(41)のルールに違反している．

(41) there 構文においては，(i)意味上の主語は indefinite でなければならぬ，(ii)動詞は be に限られる，[5] (iii)Predicate は時か場所を表わすものでなければならない．

**5.3.1. 補文の主語**

(42) †Daddy has a lot of work. Mother expects to stay at his office late. [Mother expects him to stay....]

(43) †It astonishes me to be here; I thought you were in London. [It astonishes me that you are here....]

(42), (43)は (44)に対する違反である．

(44) 補文の主語は，主文の主語と同一の時にしか省略できない．

もちろん，(44)がすべての動詞に適用される訳ではない．

(45) †I think to have my I.D. card in here.

同一であっても(44)が適用されない動詞（変形文法的に言

4）しかし，Milsark, Gary Lee, *Existential Sentences in English.* (Unpublished Ph-D dissertation, M.I.T., 1974) は (i), (ii)を文法的であるとしている．
(i) There were many people sick.
(ii) At the beach yesterday, there were several people naked.
（蛇足ながら，Milsark のこの論文は，there 構文に関する最も包括的で，優れた論文と思われる．）もちろん，すべての形容詞が許される訳ではない．
(iii) *There were many people tall. [Milsark, p.19]
しかし Akmajian, Adrian and Frank Heny, *An Introduciton to the Principles of Transformational Syntax.* (The MIT Press, 1975)は (iv) を非文法的としているので，方言差があるようだ．
(iv) *There is a man sick.

5) be 動詞以外の動詞については注4の Milsark の論文を参照のこと．

えば，Equi NP Deletion が適用されない動詞）を B & K は挙げている．(think, know, find out, report, tell, notice, say, assume, ignore, doubt, acknowledge)

**5. 3. 5. Snatched Subject**

(46)の斜字体部のように，(47)の補文から取り出されたもの（変形文法的に言えば Raisingを受けた NP）を B & K は snatched subject と呼ぶ．

(46) *The President* is likely to be reelected.

(47) It is likely that the President will be reelected.

B & K は，生徒は Raising が appear, be certain あるいは be said, be believed などに限られるということを知らないので，下のような間違いをするという．

(48) †The President is impossible to be reelected.

(49) †The door is strange to be unlocked.

生徒は，どの形容詞が Raising を許し，どれが許さないか覚えなければならない[6]．

**5. 3. 7. 前置詞の後の動名詞**

(50) †I am used to go without breakfast. 〔...used to going...〕

(51) †We look forward to see you again. [to seeing...]

前置詞の後は ing 形が来るのであるが，前置詞がtoの時は，to 不定詞と混同して，よく間違う．B & K によれば前置詞の to と不定詞の to を区別するには，後を名詞にしてみるとすぐ分かる．

(52) †I am used breakfast.

(53) I am used to breakfast.

to が必要なので，used to の to は不定詞の to ではない．

**5. 4. 1. that 節**

believe, think など，心的な行為を表わす動詞の補文は真か偽か判断できる．このような動詞はthat節を取る．

(54) †Mark thinks the beans needing fertilizer.

これに対し，want, force, stop の後の補文は真とか偽の対象とはなり得ないので，that 節を取らず，不定詞か動名詞を取る．

(55) †We will want that he visits us.

**5. 4. 2. 不定詞をとる動詞**

普通，to 不定詞内の動作は主動詞によって表わされる出来事より時間的に先（未来）のことが多い．これは(57)で will が現われることからも分かる．

(56) He has decided to go.

(57) He has decided that he will go.

従って，主動詞よりも時間的に先のことを表わす場合は不定詞が用いられる．

(58) †Nobody wants doing that.

(59) †I don't expect seeing him today.

(60) †Remember putting out trash tomorrow.

B & K は that 節と不定詞の両方を取る動詞を 10，(decide, tell, intend, promise, persuade, expect, request, plan, hope, threaten)，不定詞だけを取る動詞を 15 (want, help, forbid, strive, order, aid, allow, attempt, force, assit, encourage, refuse, offer, try, choose) 挙げている．

**5. 4. 3. 動名詞を取る動詞**

動名詞形を主な補文として取る動詞は過去のことに対する反応を表わす．(61)では彼の友達を傷つけたことは事実であるという前提のもとに，それに対し彼が regret しているのである．

(61) He regrets hurting his friend.

(61)を that 節に変えると，過去形が現われることからも，これはよくわかる．

(62) He regrets that he hurt his friend.

B&K はこの種の動詞に関し2つのルールをたてている．

(63) the fact+sentence は動名詞形に書きかえることができる．

すなわち，

(64) the fact that he is here=his being here

(65) 補文の that 節の前に the fact を入れることができる動詞は snatched subject を持たないし，不定詞も取らない．

(63)と(65)により，多くの goof が説明できる．

(66) †I resent Tom to come home so late.

(67) †Most of the pupils enjoy to have a holiday.

日本ではよく，remember は後に不定詞が来れば「忘れないで……する」，動名詞が来れば，「……したことを覚えている」であると，何か remember が例外的な動詞であると教えている．しかし，5. 4. 2. およびこの 5. 4. 3. の説明で，remember 自身が例外的でなく，不定詞および動名詞の一般的性質から来るのであるということが分かるであろう．同じことが forget, stop についても言える．最後に B & K は that 節と動名詞を取る動詞，動名詞のみを取る動詞のリストをあげている[7]．

**【教授法についての覚え書き】**

上級学生には，不定詞と動名詞の意味の違いを自分達で発見させることにより，体得させると良いとB & K は

(p. 35へつづく)

6) 下記の形容詞は Raisingを許さない．
possible, necessary, important, impossible, probable, O.K., strange, difficult, wonderful, easy

7) 前者は regret, admit, ignore, appreciate, resent, acknowledge, notice, remember, reveal, recall, 後者は finish, stop, prevent (from), enjoy である．

## 新刊書評

# *Everyman's English Pronouncing Dictionary* (14th ed.)

Originally Compiled by Daniel Jones,
Extensively Revised and Edited by A. C. Gimson
J. M. Dent & Sons, xxxii+560 pp., ¥2,880

貝瀬千章

毎日のように英語ニュースや番組をマイクの前で読むことを仕事にしている私のような者にとって，Jones の発音辞典はまさにバイブル的存在であるが，このほどこの辞典の新版（14版）が出版された．（イギリス本国では昨年12月にお目見えしたが日本の洋書店に到着したのは本年2月であった．）前の版の13版は1967年に発行されているから10年ぶりの改訂であり，初版（1917年）から数えると60年目の出版ということになる．前回の12版から13版への改版に際しては [ou]→[əu] の表記の変更のほかあまり大きな変更が認められなかったが，今回は title にも extensively revised とあるように，表記上も内容的にもかなり大きな改訂が行なわれ，より一層 Gimson 色がこくなったといえよう．Gimson は序文で "I have felt it necessary, while keeping the spirit of Daniel Jones's original work, to undertake a revision more thoroughgoing than that of any previous edition." と述べている．

今回の revision の主な点をあげてみよう．まず Jones により define され一般に使われてきた RP(=Received Pronunciation) の概念がもはや昔の definition にはあてはまらなくなり，現在ではもっと多くの人々に広く使われる発音を指すものとなった以上，pronunciation variants の記載の順序に変更が必要となったこと，母音表記にあたって短母音・長母音という quantitative difference ではなくそれらの質的な違い —qualitative difference —に注目し，単に短母音に延音符をつけて長母音を表わす表記法から短母音・長母音に別々の symbol をあてる方法が，部分的にではあるが採用されたこと，さらに社会変化に伴なう発音の変化や新語の発音の記載をふやしたこと，などである．

このうちもっとも目だつ母音表記の変更についてみれば，まず長母音の [əː] が新たに [ɜː] となっている (burn[bəːn]→[bɜːn]) が，その他の長母音 [iː] [ɑː] [ɔː] [uː] は従来のまま retain されている．短母音では [i]→[ɪ]，[ɔ]→[ɒ]，[u] →[ʊ] (pit [pɪt]，pot [pɒt]，put [pʊt]) のように新しい表記が採られているが，[e] [æ] [ʌ] [ə] はそのままである．二重母音で [ɪ] [ʊ] を含むものは当然それに応じて変更されている (bay [beɪ]) が，従来の [ɔi] は [ɔɪ] であって [ɒɪ] ではない (boy [bɔɪ])．また there [ðɛə] の [ɛə] は新たに [eə] を用いて [ðeə] と表記されているがこれは "for the sake of simplicity" と説明されている．二重母音の [ɪə, ʊə] については13版までは原著者 Jones による falling diphthongs (here [hiə]，poor [puə]) と rising diphthongs (period [píəriəd]，influence [ínflŭəns]) の区別が行なわれてきたが，それが今回の改訂ではなくなり simplify されるに至った．

こうしたqualitative difference にもとづく母音表記法は，アメリカ発音の Kenyon & Knott の辞書では早くから採用されてきたが，本書も Jones の死後 Gimson の手によりその方向に動いてきている．英国で発行された発音関係の書物でも長母音に length mark(ː) を使用しない表記法が一般的となっている．私が愛用している J. Windsor Lewis の *A Concise Pronouncing Dictionary of British and American English* や *BBC Pronouncing Dictionary of British Names* も，本書の表記法と多少違う表記法が採られているものの，短母音と長母音とを different symbols で表記している．

さて最近の社会情勢の変化によっていわゆる RP の speaker が，階級的にも地域的にも従来より広がり，かつては local variants だったものが acceptable とされるようになってきたため，いくつかの語については standard pronunciation と variant の位置が逆転したり，rarely used という label つきの variant が sometimes という label に変ったりしている．いくつかの具体例を13版と14版とで比較しつつあげてみよう．接頭語 super- で始まる語は従来 [sjuːpə-] であったが今回はすべて [suːpə-] となった (supernatural [sùːpənǽtʃrəl])．sure [ʃʊə, ʃɔə: ʃɔː] には，「中若年層は [ʃɔː] を多く用いる」と新しい注記が施された．また新しい decimal currency system の定着によって penny, pence を含む語の発音も変り，1/2 p[héipəni] は現在では [hùːfəpénɪ, hùːfəpíː] が普通である (penny の項にくわしい説明がつけられている)．garage [gǽrɑːdʒ] には新たに [gər-

ɑ́:dʒ, -ɑ:ʒ]が occasionally として付加された．その他 suit [sju:t, su:t] は [su:t, sju:t] に逆転，同様の例には，capitalize [kəpítəlaiz, kǽpi-] → [kǽpɪtəlaɪz, kəpí-], tryst (会合の約束) [traist, trist]→ [trɪst, traɪst], Uruguay [úrugwai, júər-]→[jʊ́ərgwaɪ, ór-], Newfoundland (地名) [njù:fəndlǽnd, njú:-] → [njú:fəndlənd, nju:fáʊnd-], Nestlé [nésli, nesl]→[nesl, néslɪ] がある．ただし BBC Pronunciation Unit 発行の近着リストでは，Nestlé [nésli, néslz] (as in Nestlé's coffee) となっている．golf は [gɔlf, rarely gɔf] であったものが，[gɒlf, sometimes by players gɒf] と変り，Zoological Garden については，[zulɔ́dʒikəl gá:dn] が普通で [zəʊəlɔ́dʒikl-] は variants の最後に掲げられ，しかも rarely とされていたが，今回は [zʊlɔ̀dʒɪkəl gá:dn] の次に variants の第1位として [zəʊəlɔ́dʒɪkl-] が与えられている．

従来の発音に新しい発音の加わったものもいくつかある．例えば，machination (陰謀) [mǽkɪnéɪʃn] にはアメリカでは普通の [mǽʃ-] が追加され，chastisement (懲罰) [tʃǽstɪzmənt] には [tʃǽstáɪz-] が，また Don Quixote [dɒnkwíksət] には [dɒnkɪhə́ʊtɪ, -teɪ] が加わった．

今回の改訂で新たに登場した新語は 1,032語 (うち固有名詞と略語 226語を含む)，廃語は 208語，したがって 824語前の版より増加して総計59,664語という収録語数である．新語は最近の世相を反映した用語，科学技術関係の用語，さらに新しくニュースに登場するようになった地名，略語などである．そのいくつかを列挙してみると，普通名詞では，sit-in [sítɪn], skyjack [skáɪdʒæk] prestigious [prestídʒəs], xerox [zíərɒks], polyester [pɔ̀liéstə], diode [dáɪəʊd], quasar (恒星状天体) [kwéɪzɑ:] など．固有名詞の分野では，Sri Lanka[srì:lǽŋkə], Bangladesh [bǽŋglədéʃ, -déɪʃ] Romania [ru:méɪnjə] (Rumania の spelling に代わって Romania が official spelling となったが発音は [ru:-] または [rʊ-], で，[rəʊ-] は variant としても記載されていない)，Rawalpindi [rà:wəl píndɪ] (これも [rɔ̀:lpíndi] ではない) など．新しく記載された略語の発音では U.F.O. (=Unidentified Flying Object) は [jù:efə́ʊ]で [jú:fəʊ] ではない．しかし *COD* (6版) には[jú:fəu]もあり，*Webster の 6,000 Words* には ufology [ju:fɔ́lədʒi] が入っているから，[jú:fəu] もかなり行なわれている発音といえる．L.S.D. (幻覚剤) は [èlesdí:], V.A.T. (=value added tax) は [vì:eɪtí:], Euratom は [jʊərǽtəm] である．

発音のゆれが問題となっているいくつかの controversial な語のうち，まず controversy は [kɒ̀ntrəvə:sɪ, kəntrɔ́vəsɪ] が equally common で 13版と変わっていない．sonorous は [sənɔ́:rəs] がふつうで [sɔ́nərəs] は less common, despicable は [déspɪkəbl] が standard で [dɪspíkəbl] が less common, centrifugal は [sentrífjʊgl] が standard で [séntrɪfju:g-] は variant, これらはいずれも 13版から変わっていないのだが，entirety は [ɪntáɪərətɪ] がふつうで [ɪntáɪərərətɪ] は，旧版にあった recent innovation という注記が削られ，単なる variant となったのが注目される．

今回 Gimson によって新たに書き直された introduction と explanatory notes は，新しい symbols の用語のみならずそれらを必要とした新しい発音に対する社会的 background を説明している．徐々にではあるが，伝統的な英国の社会構造も変化し，それに伴って人々の使う言語の発音も変ってきているようである．およそ英語の発音に関心をもつものにとって，広い意味での RP の speakers, とくに middle generations, の current usage を prescriptive でなく descriptive に記録している本書はまことに useful でかつ indispensable な参考書と言わねばならない．改訂を機会に印刷面でも装本面でも一段と工夫がこらされ見やすく引きやすくなったといえようが，時として [-ɪn-] が [-m-] に，[-rɪ-] が [-n-] に見える場合があるのは不便である．

**(NHK 国際局英語アナウンサー)**

---

(p. 23よりつづく)

徒に選択させる．

・その他．不振者には折にふれて補講を行なったりすることもあるが，一般に「英語ギライ」になっている者は，他教科全般に問題もあるので，ホームルーム担任とも連絡をとり，個々に対策をとる等誰もとる方策を行なっている．

## むすび

現在の制度上の欠陥や，社会的背景から来る英語教育のゆがんだ流れをどこで断ち切るかは，大変むずかしい問題ではある．しかし，英語の教師も教育に携わる一員であるならば，日常の授業の中で，例え微々たるものであっても，英語教育の本来あるべき方向へ近づける努力は続けたい．そして，教師が本来の意味での「教える力」によって，正当に評価されるようにならなければいけないと思うが，いかがなものであろうか．

**(横浜市浅野中学・高等学校教諭)**

## 新刊書評

# 『言　語　戦　争』

増田純男編
大修館書店刊，四六判，396pp.，¥1,900

國弘正雄

面白い本である．生き生きとしている．さすがにジャーナリストの手になるものである．いまわれわれが住まっている世界の息吹きが，じかに，伝わってくる．これは人間とは，世界とは何であるかについてのとば口を，言語を媒介にみごとに切ってみせた本である．

足で歩いて書いた本，というのも特長である．単に書斉科学の所産ではない．言語問題の野外科学といってよい．そしてお互い日本人にとっては，もっとも身に泌みて理会しにくい，しかし今日の世界を考える際には欠かすことのできない重要問題が，人間のもつほどよい湿度と温度をともなって描かれている．

日本人にはもっとも理会しにくいというのは，日本が単一言語，単一文化の国だからである．地方差はある．琉語，ということばがあるように，沖縄方言をどう位置づけるかの問題もある．しかし，沖縄が本土に返還されたのではない，本土が沖縄に回帰したのだ，というある人の発言にみられるように，琉語が日本語の祖型と大きく，密接にかかわっていることを思えば，単一言語の国日本，といってもそうひどい間違いではあるまい．

そして，こんなにも言語的——ということは文化的——な単一性をもつ国は，世界にもあまり例がない．だからわれわれには何とも判りにくいのである．人に道を訊ねる際に，相手が自分と同じ言語集団に属する一人であるかどうかを，一瞬ためらわずにすむ国というのは，そう多くない．ニューヨークのタイムズ・スクエアーでは，英語以外のことばがよりひんぱんに聞かれるという小松左京の観察も，SF 作家の想像にとどまらない．

この事実に昧（くら）いことが，お互いの世界理解を，かなり筋のたがえたものにしていることは疑いない．一国内の言語ナショナリズム間の葛藤，その政治的表現と緊張とは，われわれの認識のそとにある．そして高度の言語的単一性が，お互いの外国語への習熟をむずかしくしていることも事実である．

志ん生の十八番，「大工調べ」の枕ではないが，

「おめえは，ナニをどうしたい？」

「え，ナニか？　ウン，ナニは，ナンのところへやっといた」

「あっ，そうか．じゃ，おれが行ってナニしとくから，頼むぜ」

式のやりとりを，お互いは長いことつづけてきて，あまり障りを感じてはこなかった．

共通の言語をもち，単一な文化に裏付けられた安心感がここにはある．言語戦争のおきえようはずのない集団の，大らかな言語観や（自然法的とすらいえるほどの）人間観がここにはあって，われわれをホッとさせる．われわれ一応の西欧的な学問を身につけた筈の日本人ですら，八さん熊さんと同質の言語感と，その使用態様とに，ぬるま湯につかったがごとき安堵感をおぼえてきた．

だから，言語戦争をかかえるほど，言語に鋭く傾斜し，そこに命をすら踏けてきた他の多くの人間集団の言語を身につけることに，かくも難儀するのである．

この本を読むと，そういう機微がいまさらのように実感される．英語の先生方にぜひ読んでいただけたらと思う所以である．日本人の対言語意識のありようと，その特異性とがはっきり浮かび上ってくるからである．そしてそこを足抜けして，英語という，しょせんはことばの一つである外国語を教えようとしても，それは患者の体質や病歴へのなんらの配慮なしに，いたずらに画一的な投薬や治療をこととするようなもので，あまり実効はあがらない．いや，ときには英語ぎらいの拡大再生産という形をとった，生体拒否反応を招きよせるだけに了ってしまう．

本誌の読者には，第二章，カナダ・仏語地区住民の強硬路線，第三章，フランスの挑戦，それに第五章，平等を求める米国の言語戦争，の３論文がとくに興味を惹くであろう．いずれも具体例が豊富で，子どもたちに話す際の材料にもこと欠かない．インドをとり扱った第九章，東南アジアに挙例した第十章も面白い．アジアに進出，氾濫しつつある日本語をとり上げた第四章も，私にはひどく興味があった．

私事にわたって恐縮だが，私も『国際英語のすすめ』（実日新書）で言語戦争についてかなりくわしく書いて以来，この問題はたえず関心のまとだった．いまこうして，人間の営為としての言語が，いかに社会化しているかの機微が，人文科学と社会科学の２つの視点を踏まえ，今日のわれわれにふさわしいジャーナリスティックな清冽さで一本になった．心からの拍手を送る．

（国際商科大学教授）

# 新刊紹介

## ■『英語教育理論』

田崎清忠著

教授法不在といわれる現在の英語教育界で，中高の英語教師は何を拠りどころに指導したらよいのか．本書は，その疑問に対する一つの答えを与えてくれるものである．つまり，時代を超えた教授法は存在せず，それは自ら編み出すべきものであり，その素材となる理論と技術の基礎をこの書物は提供してくれる．

構成は4章から成り，第1章英語教育の基本問題と第2章言語観は序論の形式で述べられ，第3章学習理論と第4章教授理論が本書の中枢となっている．一貫して構造主義言語学による habit formation の立場で述べられ，N. Brooks, W. Mackey, R. Lado, W. Rivers らの理論が中心となり，著者独自の批判と意見が巧みに盛り込まれ，豊富な具体例も適切で，気付かぬうちに説に共鳴してしまう．

第3章学習理論では，英語教師だけでなく「ことば」を扱う指導者すべてに読んでもらいたいような気がする部分が多い．つまり教育全般にわたる広い視野で外国語学習を眺めているということである．外国語教育は関連する周辺理論，特に心理学の援助がなくては成り立たないことがよくわかる．まとめとして示されている「語学教育の原則」が17項目あげられているが大変有益である．例えば，〔原則1〕書き方より話し方優先　では，Lado の 'Speech before Writing' の根拠を述べ，日本の中学生の場合，これがそのままあてはまるかどうかについて，知的発達段階，視覚的発達，授業時間数などの点から疑問としながらも，授業効率の面から，口頭練習は，学習者の外国語に対する接触量をふやすことができるとしている．

第4章教授理論は最も内容の充実した部分で，本書の約半分の頁数が費やされている．内容は，教授法と教授法解析論に分かれ，その大部分は現在までの教授法の解説と批判がなされ，短所と思われる点については，著者の考えが適切に述べられている．特に，わが国における二大教授法である Oral Method と Oral Approach については，念入りに分析と検討がなされ，理論だけではなく，指導技術の具体例が示されているが，極めて理解し易く説得力もある．これは著者の英語教育に対する，限りない熱意と愛情によるものであろう．教授法解析論に Suitability of Teachers の criteria があげられているが，英語教師の語学力の向上についてはすべての教授法に先行するものであることを再認識させられる．

「われわれは常に新しさを求めるあまりに過去のよいものから何かを学びとることを忘れがちである．いつか初心にもどって，先人が開発した各種の教授法を詳細に学びなおしその中から利用できるファクターをとり出す作業を自分に課すことがたいせつである．」というあとがきのことばが，本書のすべてを語っている．これから英語教育を志す学生諸氏には，既刊の『英語教育技術』と併せ読んでから中高の教育実習に臨めば，ある程度の自信も芽生えようし，教壇に立っている教師にとっては，自己反省と研究意欲を盛り上げる機会を与えてくれよう．なお，巻末の参考書目は今後更に研究を進めようとする学究の徒には大へん有難いものである．

（大修館書店刊，A5判，x+359 pp., ¥2,800）

（横浜市立桜丘高等学校教諭　伊藤元雄）

## ■『新国際人の出現—海外子女教育シンポジウム詳報』

毎日新聞社編

本書は，日本として初めての国際学園である「日墨学院」が昨年秋メキシコ市で開校したのを機会に開かれたシンポジウムの記録である．シンポジウムには，城山三郎，深田祐介，國弘正雄，山口昌男氏らのパネリストの他に，日本企業のメキシコ駐在員とその家族，日系メキシコ人（日系コロニア）など多数が参加し，「文化交流を担う国際人の育成」「日本・メキシコ文化交流の推進」「国際文化交流と海外子女教育」をテーマに討議している．

ともすれば，国際化とか国際人あるいは文化交流という言葉が色褪せた流行語に終りかねない状況の中で，本書は非常に新鮮な形で，「地球化の時代」にあって日本が直面し解決を迫られている問題を訴えている．それは，いわゆる国際化の問題を海外子女教育という具体的な側面から，しかも「日墨学院」という現場をふまえて捉えているからであり，また，学者・文化人の啓発的な所説ばかりでなく，国際化の最尖端（それもヨーロッパやアメリカ合衆国ではなくメキシコ）で活躍し苦労している人びとの生の声を収めているからである．

現在海外駐在員は13万人いると言われ，その子弟が海外で得た知識や体験は，帰国してみると日本の受験体制の中では資産よりも負債となる．子供ばかりではない．日本の企業において“国際派”は疎んじられる．他方，これら駐在員はともすれば，日系人に対して根強い偏見をもち，日本人，メキシコ人，日系コロニアが共に学ぶことを理想とする「日墨学院」でも幼児園5歳児7クラスは日墨別々となっている．また日本人は国際化を，欧米人に目を向けるときとメキシコ人を相手にするとき，別々のものと考えているのではないか．

これらの声の中に，国際化時代に期待されるべき日本人像という鋭い問題が提起されている．とりわけ国際化とは，海外に出て行く少数の人びとの問題だけではない．それは「うけ入れるための国際化」でもある，という指摘は鋭い．多くの人びとに一読をおすすめする．

(毎日新聞社刊，四六判，223 pp.，¥980)

(国際商科大学教授 **浅野 輔**)

## ■『日英ことわざ考—比較文化への試み』

P. ミルワード 著
金口 儀明 解説
山 本 浩 訳

本書は2部より成り立ち，第1部「田園のことわざ」では，自然界・動植物・人間，第2部「町のことわざ」では，家庭・娯楽・美徳などに関することわざとことわざ句がおよそ400ほど扱われている．

アルファベット順に配列されたことわざ集では，個々のことわざの持味は分かっても，全体的にイギリス人の生活，文化，ものの見方，考え方を把握することは難しい．そういう観点からすると，本書はことわざが手際よく分類され，項目ごとにエッセイ風に記述が進められているために readable なものになっているし，イギリスのことわざの全体像がある程度理解できる．

英文学，とりわけシェイクスピアの作品への言及，それからの引用が多いのは，ことわざの理解に奥行きを与えてくれるので好感が持てる．また，Paddle your own canoe.(p. 129) /The exception proves the rule. (p. 150) /Charity begins at home. p. 173) などにおいては，ミルワード氏自身の解釈がうかがわれ，ことわざの多義性という点から興味深い．

書名は『日英ことわざ考—比較文化への試み—』となっているが，ミルワード氏の書かれた本文には，日英のことわざの比較とか文化の比較に類することは何も触れられていない．金口氏が各章末の解説で英語に見合った日本語のことわざを挙げられているからこういう書名になっているのではないかと思う．

問題があるのはその解説である．章を追うごとに解説に当てるスペースが少なくなっているのは致し方ないとしても，その内容は「日英ことわざ考」というよりは「日英語比較考」といったほうがいいくらいに日英語比較に力が注がれ，スペースも割かれている．それはそれなりに面白い読み物になっているが．

ミルワード氏の「まえがき」によると，当初，英語による「ことわざ辞典」を考えられたとのこと．その方面のご執筆に期待したい．

(荒竹出版刊，B6判，viii+220 pp.，¥950)

(静岡県立清水東高校教諭 **戸田豊**)

---

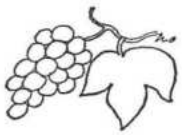
(p. 19よりつづく)

間計画をどうやら消化し，90％の生徒が常に満点を取るという意欲を燃やしてくれたのは家庭学習のおかげだと思う．しかしこれだけ頑張った生徒を，学期末に，1から5の段階に分けて評価しなければならないのは辛い．5と評価された者はいい．しかし1や2と評価された者は何を考えるだろうか，最後の時間に私は言った．「私の期待以上に頑張ったことに対しては全員に5の評価をあげます．しかしこの中には，勉強したことをしっかり記憶していて，必要なものを引き出して使うことが上手な人と上手でない人がいます．上手でない人には1や2をつけましたが，これからの勉強はそちらにも力を入れてくださいという意味です．」苦しい励ましとも申し訳ともつかぬ言葉である．と同時に2年生で落ちこぼれを作らぬため家庭学習の目標をどこに置くか自分自身に言いきかせた言葉でもある．新2年生になったばかりの始業式の日，生徒は当然のことのようにプリントを受け取りにきた．学年一番のいたずら坊主が自分よりはるかに大きな女子を捕えて，“You are the デビスト in our class.”と戯れる姿を眺めながら，生徒の期待に応える家庭学習の指導をしなければと毎日印刷室通いを続けているのである．

**(静岡県沼津市立原中学校教諭)**

◎ ◎ ◎ ◎

# 新刊案内



**『カレッジ英会話　American College Life』**　ミエコ S. ハーン著　B6判，206頁，800円　ジャパンタイムズ

授業・試験・図書館からアルバイト，パーティさらにレジャー，デートといったアメリカでの大学生活から46のテーマを選び，短い会話例とその語法的・文化的な解説をつけた“生きた英会話”のテキスト．アメリカ留学をめざす人にはアメリカの大学生活を知るためにも，また TOEFL の受験準備のためとしても参考になる．

**『アメリカのビジネス・エリート　競争社会の栄光と孤独』**　山田正喜子著　新書判，176頁，480円　日本経済新聞社

アメリカのビッグ・ビジネスを支えている経営者たちの現状から，その主な養成機関であるビジネス・スクールの教育方法，企業の人材登用・活用法，そして競争社会の敗北者だけでなく勝利者にも重くのしかかる苦悩までを手ぎわよくまとめている．

**『日本人＝〈殻なし卵〉の自我像』**　森 常治著 新書判，194頁，390円　講談社

日本人と欧米人の意識構造を価値判断を差し控えて並列的に比較し，社会的な人間関係から文学に現われた個人の内面的な意識までを包括して解明した意欲的な日本人論．

**『日本語の表情』**　板坂　元著　新書判，186頁，390円　講談社

アメリカの大学で日本文学を講じている体験から日本語と英語がそれぞれの社会で果している役割の相違を示し，また真に日本的なものを確認することの困難さにまで言及した言葉から見た日本人論．

***nihongo note 1*　*speaking and living in japan***　水谷修／水谷信子共著　新書判，160頁，1,000円　ジャパンタイムズ

英語国民の論理からは不可解としか思えない「非論理的」で「あいまい」な日本語の表現を日常生活でよく使われるものから選び，極めて論理的かつ明快に説明し，外国語として日本語を学ぶ人々にとってだけではなく，英語を学ぶ日本人にとっても日本語の発想に基づいた「不可解な英語」から抜け出すための貴重なヒントに満ちている．

**『英語の発音　指導と学習』**　牧野 勤著 A5判，267頁，1,800円　東京書籍

本書はそのタイトルが示す通り，単に知識としての音声学にとどまらず，著者の大学における長年の指導経験と音声学に関する豊かな知識をもとに，英語の発音学習や指導に直接役立つことを目的としてまとめられたハンドブックである．

**『明治アメリカ物語』**　木村　毅著　四六判，238頁，890円　東京書籍

幼年時代の著者が初めて耳にしたアメリカに関する知識は，「ダイトーリョウ」であり，坪内逍遙編『国語読本』による，共和政治の模範としてのアメリカ合州国であったという．このような著者の体験を通して語り続けられる日米文化交流の歩みは，それ自体，新時代を迎えようとする日米関係を考えるうえでの貴重な資料であるのみならず，明治の社会や文化の側面をまざまざと描き上げていて興味深い．

その他，鯨のとりもった日本開国，中浜万次郎，唐人お吉，最初の移民女性おけいの物語等，単なる日米交渉史とはひと味違った楽しい読み物にもなっている．

**『現代英語の音声　ヒアリングと音読』**　島岡　丘著　テキスト——A5判，170頁，1,000円；カセット——5,000円　研究社出版

特に音声面が弱いといわれる日本人の英語力に注目して，現代英語の音声上の実体を明らかにし，ヒアリングと音読の力を向上させると共に，実際的運用力を高めることを目的として編集されたテキスト．

アクセント，音調，音素，音声変化，つづり字と発音，英語の種類の6章からなり，それぞれに各4編（第3章のみ3編）の topics，解説および exercises が含まれているので，カセットテープを併用することにより，より効果的な学習が期待される．別冊解答書付き．

**『外人に通じる英会話　やさしいことばの組み合わせ』**　トミー植松著　テキスト——新書判，213頁，690円；カセット——2,500円　評論社

「もう少しお詰めください」というアナウンスを“Please squeeze yourself a little.”「まったくそうだ」“You can say that again.”とあいづちを打つ．本書はポピュラーな50の話題のもとに，誰でも知っているような単語や熟語を使用してごく自然な会話を組み立てた，会話表現のサンプル集．口語英語の習得に最適．

# 展望通信

**◆1978年 ELEC 夏期英語教育研修会**

A. ELEC 会場（通学制）

期間　7月31日—8月11日

会場　ELEC 会館

B. 八王子会場（合宿制）

期間　8月14日—20日

会場　大学セミナーハウス

C. 九州会場（合宿制）

期間　7月25日—31日

会場　えびの高原ホテル（宮崎県えびの市）

詳細については〒101千代田区神田神保町3—8 英語教育協議会 SP 係あて問い合わせられたい.

**◆第3回 ICU 言語科学夏期講座**

期日　7月22日—8月 4日

場所　国際基督教大学理学館

問合せ先　〒181三鷹市大沢3—10—2 国際基督教大学語学科第3回ICU 言語科学夏期講座事務局（電話 0422—33—3205）

**◆第1回幼児言語学世界大会**

期日　8月 7日—12日

場所　上野　池の端文化会館

問合せ先　上記第3回 ICU 言語科学夏期講座に同じ.

**◆ELEC 夏期英語講習会**

A. 一般コース

期間　7月24日—8月11日（午前部・夜間部）

会費　33.000円

B. 中学・高校生コース

期間　7月31日—8月11日

会費　14,000円

C. アメリカ留学準備コース

期間　8月25日—9月14日

会費　64,500円

詳細については〒101千代田区神田神保町3—8ELEC 英語研修所あて問い合わせられたい.

**◆英語教育公開講座**

期日　8月16日—20日

会場　全国勤労青少年会館サンプラザ

参加費　39,500円

申込みおよび問合せ先

〒102千代田区九段北4—1—5市ヶ谷法曹ビル206 国際教育協議会英語教育公開講座事務局（電話03—262—6668）

**◆第10回イングリッシュ・ギャラクシー**

大学・一般対象

期日　7月27日—30日

場所　東京都八王子市　大学セミナーハウス

費用　35,000円（宿泊，食費，受講料を含む）

中学・高校対象

期日　8月18日—21日

場所　東京都渋谷区代々木　オリンピック記念青少年総合センター

費用　32,000円（宿泊，食費，受講料を含む）

申込先　〒151渋谷区代々木2—23—1 ニュー・スティト・メナー1358 トミー植松語学センター

**◆財団法人語学教育研究所役員交代**

同研究所では，昨年度末をもって理事石井正之助，木村彰一両氏が退任し，本年度から中尾清秋，太田朗，寺沢芳雄の3氏が理事に就任した．桝井廸夫氏が評議員を辞し，また研究員として，伊村元道氏が退き，森住衛，伊藤嘉一両氏が加わった．他の諸役員はすべて重任した．

**◆ELEC 賞研究論文・実践記録の募集**

ELEC では，わが国の英語教育の水準向上，あるいは英語教授法の改善に直接役立つ実践研究を奨励する目的で「研究論文」または「実践記録」を広く一般に募集している．原稿締切は9月末日.

**◆原稿募集**

『英語展望』では読者から原稿を募集しております．内容・分量とも制限がありませんが未発表のものに限ります．掲載分には規定の原稿料をお贈りいたします.

英語展望（ELEC Bulletin）　第62号

定価 530円（送料120円）

昭和53年7月1日　発行

©編集人　朱牟田夏雄

発行人　酒井杏之助

印刷所　大日本印刷株式会社

発行所　ELEC（エレック）出版部（財団法人英語教育協議会）

東京都千代田区神田神保町3の8

電話（265）8911～8916

振替・東京 3—11798

# ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC